人がいて、街があって、豊かな社会があり、快適な生活がある。
　そんな私たちのくらしも、そう、調和をめざす技術の力で支えられているんですね。
上の絵は、小学6年生のCG(コンピュータ・グラフィック)アーチスト、
　瀧本大介くんが描いてくれた「ロボット・ハウス」。
おうち全体がロボットになっていて、どこにでも行けるんですって。
　次の、次の世紀くらいかな。こんなロボットが大活躍する日だって、来るかも知れません。
夢を見る力。夢を叶える力。未来へ、つづく。日立です。

ロボット・ハウスのお通りだい。

人と技術の理想をめざす
Interface

株式会社 日立製作所

訃　報

財団法人日本ハンドボール協会顧問　林　達夫氏(大同製鋼…現大同特殊鋼株式会社元副社長)は、去る6月17日午前2時3分、呼吸不全のため逝去されました。

同氏は、当財団法人発足時の副会長として協会の基礎固めに尽くされ、その後も愛知県ハンドボール協会名誉会長、全日本実業団ハンドボール連盟等の名誉会長としてハンドボール発展のためにご尽力戴きました。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

8月度の予定

[国内大会]

大会	日程	開催地
全国小学生大会	8／1～3	京都府田辺町
インターハイ	8／4～10	宮崎県都城市
全国教職員大会	8／9～13	香川県高松市
全国中学生大会	8／19～22	福井県福井市
全国高専大会	8／22～23	東京都

[国際大会]

大会	日程	開催地
男女ジュニア、アジア選手権大会	8／20～31	中国北京

第17回日本リーグの展望

新方式の導入でますますエキサイティングに

第17回日本リーグは6月6日（土）鈴鹿市民体育館での大同特殊鋼vsトヨタ自動車戦で開幕カードの火ブタが落とされました。

男子は前年度チャンピオンの大同特殊鋼と昨年度全日本総合選手権優勝の日新製鋼、この春全日本実業団選手権のタイトルを2年連続とった本田技研の3チームに湧永製薬、大崎電気といった伝統のある強豪チームを加え優勝争いは混とんとなるのではないかと思われます。

一方女子は6年連続リーグ優勝を狙う大崎電気に対し昨年度全日本総合選手権で初優勝を遂げた北国銀行、常にリーグ上位の成績を上げているオムロンが阻止できるかがポイントといえます。男女とも実力伯仲の戦国時代の様相を呈してシーズン中の順位争いはかなりの変動がありそうです。

新人では全日本期待の大型新人で湧永製薬に加入した中山選手（福岡大出身）が何といっても目玉だと思います。

社会人の高いディフェンスラインをどう突破して得点できるかが興味の的です。

現全日本監督の蒲生氏が持つ前人未到の最多得点記録（611ゴール）を抜く可能性を持つ久しぶりの逸材であることは間違いないでしょう。そのための課題としては中山選手独特の強シュートを生かす為にいかに下半身を鍛えて、するどいフェント力を身につけるかだと思われます。

女子では北国銀行の新外人選手キム・テヨン選手らの新しい外国人勢力がどれほどの力を発揮するかがみものです。また、久しぶりに一部リーグにカムバックしたジャスコがどのような活躍をみせるかも楽しみです。

個人としてはオムロン比嘉選手の円熟したプレーやファインプレーを連発するシャトレーゼのGK村山選手らの活躍にも期待したいと思います。

さて今年度より日本リーグでは今まで週末に郵送させていただいていたJHLニュースをG4機によるFAX通信で各地のリーグ試合結果と次週の予想をお伝えしています。受信側もG4機であれば瞬時に鮮明な状態でニュースが流せます。このFAX通信により土日の試合を翌日の夕方までにJHLニュースを発信させていただくことになりましたので好評のうちのスタートとなりました。

また、今まで郵送でJHLニュースを受けていてこれからFAXでの受信に切り替えたい方はごめんどうでも日本リーグ事務局までお申し出下さい。

G4FAXメモリー機能のキャパシテイがある限り登録し、FAX送信の手続きをとらせていただきます。

プレーオフと新サドンデス方式について

日本リーグ男子は今シーズンよりプレーオフ制を採用し、過去16年の歴史から第17回より新たな方向性を見い出そうとしているところです。

このプレーオフの試合方法はこれまで行なわれているバレーボール等の決勝リーグ方式と異なり、他のボール競技の日本リーグではあまり実施されていない新しいスタイルのステップラダー方式と呼ばれるものです。

他の競技のプレーオフは決勝としたいカードが結果的に前後してずれてしまうものがありますが、この日本リーグのプレーオフは前後期リーグ2回戦を戦った順位の2位と3位がまず準決勝を行ないます。さらにその勝者が1位と優勝決定戦を行うもので、リーグ戦の上位3チームによる決勝トーナメントによって最終的にチャンピオンチームを決定するものです。（図1参照）

日本リーグ運営委員会ではこのプレーオフの準決勝と決勝を全国ネットの在京TV局と現在交渉中で、このプレーオフのシステムが放映条件の重要な要素ともなっており、TV放映に関してはかなり好い感触をつかんでいます。そしてこのプレーオフを採用することにより内外から名実ともに国内最高レベルの大会として位置付けられるようリーグ運営委員会スタッフ一同努力していきたいと考えております。

また、もうひとつの新しい日本リーグの方向性として『2点連取の新サドンデス方式』が現在リーグ運営委員会で検討されている段階です。（図2参照）

この方式は他のスポーツにはない画期的なもので、おそらく実施されれば各方面にかなりの反響を呼ぶものとなるのではないでしょ

うか。

このサドンデス方式は、正規の60分間の試合が引き分け試合となったとき、延長戦を2点連続で得点を上げたチームを勝ちとするもので、1点ごとにアドバンテージが変わるスリリングな新サドンデス方式です。

最近の日本リーグ各チームのレベルは非常に均衡しており、過去3年間の引き分け試合は5・8%～8・3%で増加する傾向にあります。そこで日本リーグ所属の各チームにこのサドンデス方式のアンケートを集計したところ賛成29、反対25、保留1、マスコミ関係10社による結果は全社賛成という結果でした。そこで日本リーグ運営委員会では今シーズンからプレーオフの中で一部採用することになりました。（詳細は日本リーグプログラムを参照下さい。）

このサドンデスを通常のリーグ戦で採用されるとどのようなことが想定できるかといえば、まず両チームはともに最高のオフェンスと最高のディフェンスを状況的に求められます。そして1点を取ることの難しさ、1点を守ることの大切さをプレーの内容で要求されます。また、そのような試合展開になったときの充実ぶりは観客の方々に対して感動を呼ぶものとなるのではないでしょうか。

その一方で、選手及びコーチングスタッフには精神的、肉体的なプレッシャーは相当なものがかかることは否めません。もちろん、本来はリーグ戦であるから引き分けがあってよいとする考えも基本的にはあります。

しかし、日本リーグがハンドボール界での役割として普及という課題のシンメトリーに片や強化（レベルアップ）という課題も重要なものとしてあります。そのようなことから日本リーグのメジャー化というテーマに照らしながらファン層の拡大という側面を考えてみても、このことに取り組んでいくことは日本リーグにとってプラス要素が多分に含まれているのではないかと思えます。そして日本リーグはある意味で「国際的に接戦に強い選手を育成する」というつながりも見え、このことも大切なものとして受けとめる必要があると思うのです。

また、'91年の広島アジア選手権兼アジア予選で五輪出場が途切れた今、失うものも何も無いと同時にこの五輪出場権を奪還し、これまで以上のハンドのメジャー化を図ることが日本ハンドボール界の最重要課題でありハンドボール関係者のみならず愛好者の皆様にも周知の事実といえる背景があることもあわせて考えたいと思います。

そしてこの新サドンデス方式は極限状態にあって勝つためになにをすべきかを実際のゲームの中で体現するものであり、このことがハンドボールのレベルアップとメジャー化につながるひとつの要因として考えられ、引いては日本リーグの各試合会場により多くのファンの皆様に足を運んでいただくものとなればさらに意義深いものとなるのではないでしょうか。

この日本リーグのプレーオフと新サドンデス方式に関するご意見を読者の皆様からご意見をいただければ幸いです。必ず皆様のご意見をリーグ運営委員会に意見として提出させていただき、その結果を運営委員会の終えたあとの次期のこの欄にてご報告させていただきたいと思います。皆様のご意見をお待ち申し上げます。

日本リーグ運営委員会
広報担当　鵜澤　潔

◎ご意見の宛先
〒150　東京都渋谷区神南1の1　岸記念体育会館
（財）日本ハンドボール協会
日本リーグ運営委員会

【新サドンデス方式】

30—10—30
引き分け試合
Aチーム　Bチーム
○得点
経過時間↓
○ ○ ○ ○
○○2点連続
負け　勝ち

（図2）

【日本リーグのプレーオフ】

優勝
1位　2位　3位
2回戦総当りリーグ戦

（図1）

第33回全日本実業団選手権大会女子の部

ジャスコが2連覇を飾る

第33回全日本実業団選手権大会女子の部は5月8日から10日までの3日間、大阪中央体育館で開催されました。

各チームとも戦力に大きな差がなく、本命なき激戦となったが、昨年のこの大会で見事な復活を遂げたジャスコが、今年も決勝でオムロンに快勝、2連覇を飾った。

1回戦

大和銀行 19（8－8、11－3）**11 ソニー国分**

〔戦評〕両チームとも若さあふれたプレーで前半は同点で折り返した。後半、ソニーが攻撃に決め手がなくなったのに対し、大和のポスト、速攻が冴え、ペナルティー含みで連続5得点しふり切った。

〔ソニー〕

	選手	得
GK	古賀	0
GK	大本	0
FP	大住	1
FP	永尾	3
FP	平山	3
FP	安山	1
FP	桑原	0
FP	林	1
FP	重山	0
FP	徳光	1
FP	桑谷	1
FP	荒木	0
		11

審・村尾、佐谷

〔大和〕

	選手	得
GK	竹本	0
GK	上田	0
FP	山尾	4
FP	木口	2
FP	小池	5
FP	伊藤	0
FP	日野	1
FP	竹田	4
FP	橋本	0
FP	松田	1
FP	吉村	0
FP	荒川	2
		19

シャトレーゼ 18（7－5、11－7）**12 自衛隊体育学校**

〔戦評〕両チームともスローテンポな攻撃で立ち上がった。しかし、実力に勝るシャトレーゼが点差を広げ楽勝。自衛隊体育学校は、なかなかの善戦であった。

〔自体〕

	選手	得
GK	鏡森	0
GK	福田	0
FP	高洲	3
FP	佐藤	0
FP	田中	0
FP	田原春	6
FP	三浦	0
FP	米野	2
FP	小林	0
FP	麻生	0
FP	黒木	1
FP	竹村	0
		12

審・馬場、浜田

〔シャト〕

	選手	得
GK	村山	0
GK	工藤	0
FP	小松	7
FP	山岸	1
FP	松沢	1
FP	野沢	2
FP	芦ヶ谷	0
FP	千葉	1
FP	小俣	4
FP	峯	1
FP	原子	1
FP	鎌田	0
		18

オムロン 18（9－5、9－5）**10 JUKI**

〔戦評〕立ち上がり、なかなかの接戦で始まったが、オフェンスで勝るオムロンは、速攻、カットイン、サイド攻撃で着々と加点し、楽勝した。JUKIは、ボールまわしの割にはシュートが決まらない。このあたりに課題がありそう。

〔JUKI〕

	選手	得
GK	久保	0
GK	山田	0
FP	永尾	1
FP	許田	3
FP	村実	0
FP	和久田	1
FP	高塚	1
FP	田中	1
FP	飯田	1
FP	山口	2
FP	吉田	0
FP	武井	0
		10

審・浅井、岸本

〔オム〕

	選手	得
GK	川島	0
GK	城下	0
FP	上田	0
FP	中山	3
FP	古田	1
FP	比嘉	2
FP	橋本	4
FP	斉藤	0
FP	吉田	0
FP	石村	2
FP	光井	1
FP	田中	5
		18

日立栃木 28（12－11、16－4）**15 ムネカタ**

〔戦評〕前半、両チームとも積極的な攻撃で点の取り合いとなり、そのままの展開で後半に入る。後半、やはり実力に勝る日立が速攻、セットともに冴え、ムネカタのミスを誘い、一方的な試合となった。しかし、ムネカタの善戦が目立った。

〔ムネ〕

	選手	得
GK	佐々木	0
GK	山影	0
FP	皆川	3
FP	菅野	0
FP	遠藤	0
FP	庄子	2
FP	桜井	3
FP	村上	1
FP	吾妻	1
FP	遠藤	2
FP	藤根	2
FP	大橋	0
		15

審・佐藤、重根

〔日立〕

	選手	得
GK	坂本	0
GK	板谷	0
FP	吉鶴	2
FP	新井	10
FP	神長	2
FP	柳田	1
FP	飯塚	2
FP	貴田	3
FP	市来	4
FP	堤	1
FP	小柏	2
FP	高野	1
		28

2回戦

ジャスコ 26（13－9、13－8）**17 大和銀行**

〔戦評〕若い大和は、オフェンスの組立てが不十分で、どうしても攻めきれず、個人プレーに荒さが目立った。これに対しジャスコは、オフェンス、ディフェンスともに大和を上回り、あぶなげなく勝った。

〔大和〕

	選手	得
GK	増見	0
GK	上田	0
FP	山尾	7
FP	木口	4
FP	小池	1
FP	伊藤	1
FP	日野	1
FP	竹田	3
FP	橋本	0
FP	松田	0
FP	吉村	0
FP	荒川	0
		17

審・佐谷、村尾

〔ジャス〕

	選手	得
GK	小林	0
GK	長谷川	0
FP	林	4
FP	東出	6
FP	勝島	2
FP	金	3
FP	山田	1
FP	飯田	2
FP	成澤	0
FP	徳永	2
FP	土師	6
FP	市川	0
		26

北国銀行 20（12－7、8－9）**16 シャトレーゼ**

〔戦評〕両チームともキビキビし

〔シャト〕

	選手	得
GK	村山	0
GK	工藤	0
FP	小松	2
FP	生方	0
FP	山岸	0
FP	松沢	2
FP	野沢	1
FP	芦ヶ谷	2
FP	小野寺	4
FP	鶴田	0
FP	千葉	0
FP	小俣	5
		16

審・馬場、浜田

〔北国〕

	選手	得
GK	岩井	0
GK	古沢	0
FP	松田	5
FP	松下	4
FP	釣川	0
FP	西川	0
FP	坂井	0
FP	金	3
FP	上田	4
FP	松山	0
FP	森	2
FP	谷本	2
		20

た動きで好試合を展開。北国は速いパスまわしよりスピードのある攻撃を展開する。これに対し、シャトレーゼも好オフェンスを展開するも、セットオフェンスの差が勝敗につながった試合であった。

オムロン 26〔13-10, 13-13〕**23 大崎電気**

〔戦評〕2回戦屈指の好カード。前半は、オムロンのスピードが大崎を上回り3点差で折り返した。しかし、大崎は金、尹のコンビで16分に同点とし、一度は逆転したが、残り5分、オムロンの粘りのハンドの前に敗れた。オムロンの堅いディフェンスの勝利といえる。

	〔大崎〕	得
GK	南雲	0
GK	宗方	0
FP	高祖	0
FP	杉原	0
FP	前川	4
FP	広瀬	0
FP	酒井	1
FP	鷲宮	0
FP	野田	4
FP	金	6
FP	尹	6
FP	田中	2
		23

	〔オム〕	得
GK	川島	0
GK	城下	0
FP	上田	0
FP	中山	5
FP	古田	5
FP	比嘉	6
FP	橋本	2
FP	斉藤	3
FP	吉田	1
FP	石村	4
FP	光井	0
FP	田中	0
		26

審・岸本・浅井

日立栃木 32〔19-13, 13-11〕**24 ブラザー工業**

〔戦評〕好チーム同士のキビキビしたスピーディな動きのゲームであった。実力に勝る日立の優位は動かず、楽勝で終った。日立の中国コンビはかなりの戦力になっており、今後の活躍が期待できる。

	〔ブ工〕	得
GK	喜多	0
GK	西住	0
FP	日比野	9
FP	西	9
FP	小栗	0
FP	甲斐	1
FP	田島	2
FP	高木	0
FP	進藤	3
FP	畑中	0
FP	原	0
FP	児玉	0
		24

	〔日立〕	得
GK	坂本	0
GK	板谷	0
FP	新井	6
FP	神長	1
FP	柳田	0
FP	飯塚	1
FP	貴田	1
FP	市来	6
FP	堤	1
FP	小柏	4
FP	蒋	9
FP	陳	3
		32

審・重根・佐藤

順位決定戦

ソニー国分 15〔9-8, 6-6〕**14 JUKI**

〔戦評〕前半立ち上がり、僅差のゲーム展開で1点差で折り返す。ともによく似たタイプのチームカラーで、ロングシュートのパワーに欠けるため、カットインプレーに頼り、破壊力に乏しい攻撃力をくり返す。わずかにソニーの粘り勝ちであった。

	〔JUKI〕	得
GK	久保	0
GK	山田	0
FP	永尾	2
FP	許田	0
FP	村実	1
FP	和久田	2
FP	高塚	2
FP	田中	1
FP	飯田	5
FP	山田	1
FP	吉田	0
FP	武井	0
		14

	〔ソニー〕	得
GK	古賀	0
GK	大本	0
FP	大住	1
FP	永尾	3
FP	平山	2
FP	安山	3
FP	桑原	3
FP	林	2
FP	徳光	1
FP	桑名	0
FP	吉永	0
FP	荒木	0
		15

審・村尾・佐谷

自衛隊体育学校 18〔9-8, 9-6〕**14 ムネカタ**

〔戦評〕両チームとも似た型のプレーで、動きが鈍く、シュートミスが多い。自衛隊が田中のカットインで着々と得点を重ね、常に先行して接戦をものにした。自衛隊のスタミナ勝ち。

	〔ムネ〕	得
GK	佐々木	0
GK	山影	0
FP	皆川	2
FP	菅野	1
FP	遠藤	0
FP	庄子	1
FP	桜井	3
FP	村上	0
FP	吾妻	1
FP	遠藤	3
FP	藤根	3
FP	大橋	0
		14

	〔自体〕	得
GK	鏡森	0
GK	福田	0
FP	高洲	3
FP	佐藤	0
FP	田中	5
FP	田原春	4
FP	三浦	0
FP	米野	1
FP	小林	3
FP	麻生	0
FP	黒木	2
FP	竹村	0
		18

審・源野・吉田

大崎電気 24〔15-11, 9-7〕**18 大和銀行**

〔戦評〕すべり出し、大和は先行するが、細かいパスプレーにとられシュートチャンスを見出すのが少なくなり、大崎の多彩な攻撃にリードを許す。余裕のないプレーから若さとあせりによりミスを続出し、遂にペースをつかめずに終る。

	〔大和〕	得
GK	竹本	0
GK	上田	0
FP	山尾	2
FP	木口	1
FP	小池	2
FP	伊藤	1
FP	日野	2
FP	竹田	2
FP	橋本	2
FP	松田	3
FP	吉村	0
FP	荒川	3
		18

	〔大崎〕	得
GK	南雲	0
GK	宗片	0
FP	高祖	1
FP	杉原	1
FP	前川	4
FP	酒井	5
FP	鷲宮	1
FP	野田	2
FP	金	3
FP	尹	7
FP	冨田	0
FP	田中	0
		24

審・重根・佐藤

シャトレーゼ 21〔10-4, 11-7〕**11 ブラザー工業**

〔戦評〕シャトレーゼが、オフェンス、ディフェンスともにブラザーを圧倒した試合。ブラザーは何とかシャトレーゼのオフェンスをかわそうとしたが、力量の差はいかんともしがたく、シャトレーゼの順当勝ちに終った。

	〔ブ工〕	得
GK	喜多	0
GK	西住	0
FP	日比野	2
FP	西	1
FP	小栗	1
FP	甲斐	3
FP	田島	2
FP	高木	0
FP	進藤	0
FP	三好	1
FP	松浦	1
FP	児玉	0
		11

	〔シャト〕	得
GK	村山	0
GK	工藤	0
FP	小松	4
FP	生方	0
FP	松沢	2
FP	野沢	0
FP	芦ヶ谷	1
FP	小野寺	2
FP	鶴谷	4
FP	千葉	0
FP	小俣	8
FP	峯	0
		21

審・佐谷・村尾

11位決定戦

JUKI 18〔8-6, 10-6〕**12 ムラカタ**

〔戦評〕両チームともオフェンスでつながりの悪さとミスが目についた。試合は、オフェンス、ディ

	〔ムネ〕	得
GK	佐々木	0
GK	山影	0
FP	皆川	3
FP	菅野	1
FP	遠藤	0
FP	庄子	2
FP	桜井	5
FP	村上	1
FP	吾妻	0
FP	遠藤	0
FP	藤根	0
FP	大橋	0
		12

	〔JUKI〕	得
GK	久保	0
GK	山田	0
FP	永尾	2
FP	村実	0
FP	和久田	2
FP	高塚	5
FP	田中	2
FP	飯田	4
FP	山口	1
FP	吉田	2
FP	武井	0
		18

審・重根・佐藤

フェンスともに一歩リードのJUKIの楽勝であった。

9位決定戦

ソニー国分 25〔15－7 10－9〕**16 自衛隊体育学校**

〔戦評〕ソニー国分が、オフェンス、ディフェンス両面で自衛隊を圧倒した。このレベルでは自衛隊のオフェンスはなかなか通用せず、ソニー国分が楽勝した。

得	〔ソニー〕		〔自体〕	得
0	古賀	GK	鏡森	0
0	大本		福田	0
1	大住		高洲	1
3	永尾	FP	佐藤	0
7	平山		田中	7
6	安山	〔審・	田原春	5
4	桑原		三浦	0
0	林	村佐	米野	0
2	徳光		小林	0
1	桑谷	尾谷〕	麻生	0
0	吉永		黒木	3
1	荒木		竹村	1
25				16

7位決定戦

大和銀行 25〔13－12 12－6〕**18 ブラザー工業**

〔戦評〕前半立ち上がりより一進一退の互角の展開。終盤3点を連取した大和が1点をリードして折り返す。後半に入り、ブラザーは立ち上がり7分過ぎまで無得点。この間に4点を連取され5点差をつけられてほぼ勝負は決した。大和は中盤以降も着々と加点、粘るブラザーを突き放した。

得	〔大和〕		〔ブエ〕	得
0	増見	GK	喜多	0
0	上田		西住	0
5	山尾		西	5
4	木口	FP	小栗	0
5	小池		甲斐	5
2	伊藤	〔審・	田島	0
0	日野		高木	0
0	竹田	岸浅	進藤	1
0	橋本		畑中	0
8	松田	本井〕	三好	5
1	吉村		松浦	2
0	荒川		児玉	0
25				18

5位決定戦

大崎電気 18〔8－8 10－6〕**14 シャトレーゼ**

〔戦評〕両チームとも手の内を知り尽くした同士の対戦。順位決定戦ということもあって双方ともに持ち前のファイトが見られない。

試合は個人技に勝る大崎があぶなげなく勝った。

得	〔大崎〕		〔シャト〕	得
0	南雲	GK	村山	0
0	宗片		工藤	0
0	高祖		小松	2
4	杉原	FP	生方	0
1	前川		山岸	1
0	広瀬	〔審・	松沢	3
1	酒井		野沢	1
1	鷲宮	村佐	芦ヶ谷	0
3	野田		小野寺	0
4	金	尾谷〕	鶴谷	2
4	尹		千葉	0
0	田中		小俣	5
18				14

準決勝

ジャスコ 33〔13－13 20－15〕**18 北国銀行**

〔戦評〕前半はお互いに速い動きから得点し、譲らないまま同点で折り返す。後半も1点を争うシーソーゲームを展開したが、20分過ぎ、ジャスコの動きと突進力が勝り、北国銀行をふり切った。

得	〔ジャス〕		〔北国〕	得
0	小林	GK	岩井	0
0	長谷川		古沢	0
8	林		松田	5
7	東出	FP	松下	3
4	勝島		釣川	0
5	金	〔審・	西川	0
0	山田		坂井	0
1	飯田	岸浅	金	10
0	成澤		上田	3
0	徳永	本井〕	松山	0
8	土師		森	1
0	市川		谷本	6
33				28

オムロン 25〔12－9 13－13〕**22 日立栃木**

〔戦評〕日立は、縦の三角パス、オムロンは全面を使っての速いパスまわしで攻撃、甲乙つけがたい熱戦で終始していた。しかし、オムロンが速い動きと堅いディフェンスが日立を上回り僅差で勝利をものにした。

得	〔オム〕		〔日立〕	得
0	川島	GK	坂本	0
0	城下		板谷	0
0	上田		吉鶴	0
4	中山	FP	新井	1
0	吉田		神長	0
8	比嘉	〔審・	飯塚	0
3	橋本		貴田	2
4	斉藤	浜馬	市来	6
0	吉田		堤	0
1	石村	田場〕	小柏	5
0	光井		蔣	7
5	田中		陳	1
25				22

3位決定戦

日立栃木 32〔17－13 15－14〕**27 北国銀行**

〔戦評〕日立は市来を中心に縦パス、ブロックを活用したパスワークにより攻撃で常に先行。中国の蔣、陳ともによくシュートを決め、前半のリードを守り切った。

北国はオフェンスで決め手を欠いたのが今後の課題。

得	〔日立〕		〔北国〕	得
0	坂本	GK	岩井	0
0	板谷		古沢	0
1	吉鶴		松田	1
11	新井	FP	松下	4
0	神長		釣川	2
0	柳田	〔審・	西川	0
5	飯塚		坂井	0
0	貴田	岸浅	金	10
6	市来		上田	4
5	小柏	本井〕	松山	0
4	蔣		森	0
0	陳		谷本	6
32				27

決勝

ジャスコ 31〔15－8 16－4〕**22 オムロン**

〔戦評〕ジャスコの果敢な動きにスタートからオムロンは押され続け、ミスも続出。15分過ぎからは7連続得点をジャスコに許し、14－6と大量リードを奪われて勝敗は決した。

後半立ち上がり、オムロンも反撃を見せ、3点差まで追い上げたが及ばず、次第にジャスコが速攻を決めて突き放した。

得	〔ジャス〕		〔オム〕	得
0	小林	GK	川島	0
0	長谷川		城下	0
6	林		上田	0
4	東出	FP	中山	5
3	勝島		古田	2
3	金	〔審・	比嘉	7
1	山田		橋本	2
5	飯田	浜馬	斉藤	1
3	成澤		吉田	0
1	徳永	田場〕	石村	4
5	土師		光井	0
0	市川		田中	2
31				23

第33回全日本実業団選手権大会女子の部をふり返って

全日本実業団連盟副理事長　吉澤力男

　私は、全日本実業団ハンドボール選手権大会、大阪会場の主管である大阪ハンドボール協会にも所属している関係上、本大会の運営を担当するようになりすでに、4回目になります。寄稿のチャンスがありましたので、感じたことの一端を述べさせていただきます。

■テレビ放映も好評

　大阪大会は、念願のテレビ放映に踏み切っていただき2回目の大会になります。このテレビ放映にまつわる全日本実連をはじめとする関係者の苦労はさておき、ハンドボールの試合がテレビに映る、それも毎年5月の全日本実業団選手権の決勝戦、大阪大会で放映されることが実現され、今後も続けられる見通しがついたことは、喜こばしい限りであります。

　従来、ハンドボールの試合がテレビに映るのは、全日本総合の決勝戦、それも男子のみおよび、国際試合と相場が決まっていたが、ここにプログラムが一つ増えたことになります。私は、ハンドボールの試合はテレビ映りが良く、素人の我が家のおかみさんが見ても「結構面白い」と言っており、テレビ会社も商品価値として十分認めており、何とかこの決勝戦を全国のハンドボールファンのみなさんに見ていただけるよう、関係者の一人として育てていきたいと情熱を燃やしております。

　5月10日の放送では、野球放送でおなじみの西澤アナウンサーと緒方全日本監督の解説で、西澤アナは2回目ということもあり、よく情報を入手されており、緒方解説者とは息がピッタリでなかなかの好評でありました。来年は、さらにスピードと迫力のある試合をお観せし、ハンドボール人気の向上に助力してくれるものと期待しております。

■立派だったジャスコ

　ところで、少し大会の内容について評論しますと、当大会は、年度最初のビッグ大会であり、各チームとも新編成後の最初の試合ということになります。それぞれ補強し新チームで合宿を重ね、万全を期して大会に臨んできます。このため極端に言いますと、女子の場合、どのチームにも決勝戦進出のチャンスがあるということです。いい例が平成3年度のジャスコの優勝であります。日本リーグでは二部でありながら、日本リーグ一部勢をなぎ倒し、初優勝に輝きました。さらに本年度では、日本リーグ一部にも復帰し、自信に満ちた試合運びで、本大会二連勝の偉業を達成しました。この大会を観た限りでは、ジャスコ、オムロンを筆頭に、日立栃木、北国銀行、大崎電気のチームのまとまりと勢いが印象に残りました。

■課題は観客動員

　この4年間の大会運営を通じ、毎年反省しながら、未だに解決できない問題点が一つあります。それは、観客が思うように入らないという悩みであります。主管の大阪協会では毎回、神田会長の叱咤激励のもと、観衆集めに知恵をしぼり、それなりに手を打っていますがなかなか観衆を集めきっていません。昭和62年のジャパンカップ、ユーゴ対東独戦では、4千人を集めた実績があります。何とか、次回の大会に備え、観客の増加に向け対策を講じていきます。

　次に大会の運営、つまり裏方さんの仕事ですが、毎回出場チーム、大会関係者のみなさんの助言・指導に対し反省し、是正しております。具体例をあげますと、誰が裏方さんを担当しても迷わないよう、元理事長の植村さんを中心に、企画、大会運営、諸会議、表彰の行事、手続き、ならびに主催の全日本実連と主管の協会の役割分担を標準化し、これにより大会がスムーズに運営されるようになりました。これは反省の上に作業された大きな成果であります。

　本年の大会では、渡辺全日本実連会長より報道陣に対するきめの細かいコミュニケーションと、審判団の毅然とした試合運営の指示があり、それなりに名古屋、大阪ともども試合運営にあたり、大新聞で大きく報道いただき、試合運営上何らトラブルもなく、会長重点目標も達成できた大会で幕を閉じることができました。

　思いつきのまま駄文をならべましたが、ハンドボールを愛する一人の人間のたわ言とお聞き流し下されれば幸甚でございます。

フランスカップに参加して　選手たちの感想文

大会成績

【大会期間】
5月19日～24日

【参加国】
7か国　8チーム

【試合結果】

チーム	得点	前半	後半	得点	相手
フランス	33	18－14	15－15	29	日本
スウェーデン	35	18－16	17－9	25	日本
キューバ	38	18－16	20－21	37	日本
チェコスロバキア	29	16－8	13－9	17	日本
U・S・IVRY	32	18－9	14－11	20	日本

【順位】①CEI②スウェーデン③ルーマニア④キューバ⑤チェコスロバキア⑥フランス⑦U・S・IVRY⑧日本

【その他の試合】

▼5月16日

チーム	得点	前半	後半	得点	相手
U・S・IVRY	28	16－12	12－12	24	日本

▼5月17日

チーム	得点	前半	後半	得点	相手
DAN KLK	26	13－8	13－16	24	日本

フランス遠征を終えて

コーチ・田口　隆

新生全日本チームになって、3月の遠征に続き2度目の海外遠征となった、フランスの〝チャレンジカップ〟は、7か国（8チーム）の参加のもとに行われました。今回はオリンピックイヤーということもあり、前回参加したときはクラブチーム主体の大会であったのが、私たち日本チームとU.S.IVRYチームを除く6チームはオリンピックの出場権を持つナショナルチームで、世界のトップレベルの大会となり、大いに盛り上がりました。

私たち日本チームは、4月の合宿からトレーニングを開始した、アタックDFを今回は大会を通して行いました。選手の中には、アタックDFをしたことのある選手がいなく、戸惑いもあり、また、マンツーマンDFになるなど不具合の面も多くは出たのですが、まだ回数としては満足いくものでないにしろ、速攻への展開も見られ、得点力アップに継がりました。得点力アップといえば、今回から中山が参加したことにより、セット攻撃での柱が出来ました。その中山を中心に他の者もまんべんなく得点を挙げることが出来、ひとつの型が出来つつあるように感じました。

他の国を見ますと、CISは半数近くが2m台という相変らずの大型チームでありながら、速攻の速さ、ボールの継ぎなど目を見張るものがあり、これに外国でプレーしている選手が戻って来るとやはりバルセロナ・オリンピックの優勝候補ナンバーワンであるように見えました。

スウェーデンについては、戦法がバラエティーに富み、順調に仕上がって来ていました。

他の国についても、速攻が素晴らしく、確率の良い所で得点を挙げていました。

また、接戦の場面でも落ち着いてプレーするなど経験豊富な所も見られました。

日本チームもこれらのチームと互角に戦える場面もあるので、それを60分間続けることの出来る、スタミナ、パワー、精神力、そして相手がいろいろ変化してきた場合の対応力をつけるため、基礎技術のトレーニングをしっかりと積み、世界のトップレベルと互角以上に戦えるようにしていきたいと思います。

フランス遠征での目標

宇多村　誠

今回のフランス遠征兼フランスカップでの目標は、自分は前回のヨーロッパ遠征兼世界選手権B大会において、あまりにも最悪な状態で終ったと思うので、だから今度こそ、ミスをなくそう、「いまやらねばいつできる、俺がやらねば誰がやる」という言葉です。この言葉は、フランス行く前に、ハンドボールイベントで見ました。

前回の団長を務めた西山逸成先生のモットーです。特に自分は、練習のときでも簡単にミスをしてしまい、年上の人から口うるさく言われますが「お前がうまくなってほしいから」と思っているのに違いありません。「こうしてうまくなるんだな」と思いました。しかし、基本的なこと、技術面、精神面、体力面、どれか一つでも抜けていたらだめだと思います。

フランスに行く前三つの約束事を決めました。まず闘争心、二つ目は、自分のやったプレーに意味がある、三つ目は、OF、DF共に攻めるということです。

これは、練習や試合でやったことを書くためにあるのです。特に試合でやったことを主に書きました。全部で7試合行いましたが、結局、自分が出た試合は、1試合でしたが、試合に出なかったときも試合を見て思ったこと、感じたことを書きました。しかし、なかなか書けなくて悩んだこともありました。そこで同じ部屋の全日本の守護神、橋本さんに助けてもらいました。

橋本さんのを見ると、具体的に書いてあるので、自分のと比べて見てもらいました。全く内容が違いました。自分は何か別の事を書いていました。それを見て「お前何に書いてんだ」と言われたこともありましたっけ。

自分は試合を通じて見て来ましたが、やはり日本人と外国人の差は、パワー、スピード、といったものだと思います。試合は60分。60分の中の50分は戦っているけど、あとの10分が全くだめでした。体力の差がやっぱり激しいと思いました。

試合は全敗でしたが、各部分で良い面が出て来たと思います。今回は目標をテーマとして書きましたが、あくまでも、全日本チームの目標は、アジアのチャンピオンになるということです。前回の世界B、今回のフランスカップで結構、世界相手に自信がついたと思うの

で、3年後のアジア選手権と共に4年後のアトランタ・オリンピックに向け、一層の努力を日々、積み重ねて行きたいと思います。

自分は4年後は23歳全日本のアタッカーを目標にがんばりたいと思います。

テストマッチについて

魚住 和彦

本大会へ向け、最終チェックをする意味で大事な試合となった。

当日、長時間バス移動の後で、体調を整えるのに苦労したが、みんなアップでは、充分に気合いが入っていた。ただ、会場の照明が暗く、キャッチミスが多かったことが気にかかったが……。

立ち上がり、相手DFを見てとまどった。高めの一・二・三DF、しかもよく動く。一線DFに対しての練習が多かったこともあり、攻めのきっかけがつかめず、また、すぐ対応して指示を出せる選手がいなかった。その結果、シュートまで行く以前のミスが多発し、8分間ほど空白の時間が続いた。この間の失点が5点、結局この5点が最後まで響いた。

中盤以降は、サイドの切りやポストの中継を利用して点数は取れるようになった。しかし、取っては取られる展開で、点差は縮まらなかった。DFが全然守れなかった。

コーチの話しでは、自分のマークを簡単に離し過ぎるということだった。確かに、相手のクロスに対し、チェンジなのか、そのままなのか、はっきりせずマークを離してしまうということが多かった。

このマークを離したという点では、前半よりも後半が多かったそうだ。でも、失点は変わっていない。何故このような結果が出たのかという質問があったが、自分なりに考えた所、一つには、一人がマークを離してもまわりのDFがちゃんとそのフォローへ行っていたからだと思う。フォローへ行けたということは、自分のマークを見ながら、まわりにも充分注意していたことにもなり、また、よく足が動いていたということにもなる。このことが、疲れの見えて来た相手のOFのミスを誘う形になり、終了間際の連続速攻、連続得点へと結びついたのだと思う。

立ち上がりの空白の時間さえなければ、いい試合が出来たに違いない。しかし、ゲームは60分と決まっていて、〃れば〃〃たら〃は通用しないのである。

多くの反省、課題を残した試合ではあったが、すべてプラス施行で考えようということからいえば、前日のイブリー戦と比べれば、2点、点差が縮まったことになり、その意味では良い結果が残せたと思う。

この試合が、3日後に控えた本大会へ向けて、まずまずの調整となったことには違いない。

男子ナショナルフランスカップ派遣選手団

役職	氏名	生年月日	所属
団長	植村　繁	1928.12.1	日本協会常務理事
監督	蒲生晴明	1954.4.5	大同特殊鋼
コーチ	田口　隆	1961.7.23	本田技研工業
コーチ	松井幸嗣	1957.7.26	日本体育大学
ドクター	高原茂之	1964.5.20	浜脇病院
ドクター	藤井健一	1964.7.14	浜脇病院

選手	氏名	生年月日	身長	体重	所属
G.K	橋本行弘	1965.9.17	185cm	80kg	本田技研工業
	林　康一	1967.3.3	181	75	大同特殊鋼
	多田恵久	1967.6.18	185	80	湧永製薬
C.P	甲斐章義	1966.4.22	183	71	大崎電気工業
	魚住和彦	1966.10.24	188	78	大崎電気工業
	梅基幸一	1967.2.26	182	72	本田技研工業
	末岡政広	1967.9.1	176	74	大同特殊鋼
	田中　茂	1967.9.2	182	76	三陽商会
	土屋幸司	1969.5.3	178	78	大崎電気工業
	中山　剛	1969.7.4	191	75	湧永製薬
	藤井孝志	1969.7.27	189	89	大同特殊鋼
	佐藤壮一郎	1969.8.7	178	73	山形教員
	渡辺　浩	1967.10.20	182	72	三陽商会
	林　昌英	1968.7.31	181	65	日新製鋼
	源内利之	1968.10.12	182	73	日新製鋼
	宇多村　誠	1963.1.6	191	73	大同特殊鋼

イブリ戦について

多田 恵久

今回初めて全日本チームとして

海外遠征をし、フランスカップに出場出来たことが、自分にプラスになったと思います。

トレーニングマッチのイブリ戦では、前半12対12と、点を取ったり取られたりし気の緩めない攻防が続きましたが、後半の残り10分ぐらいで、こちらのミスなどから相手に攻められてしまい28対24で敗れてしまいましたが、本番につなげられるいい試合だったと思います。

また、今回の遠征でスタッフの方から、選手たちに、3つの目標事がありました。

1つ目は、闘争心を持つこと

2つ目は、自分のプレーに意味があること

3つ目は、DF、OFで常に攻めること

という3つの目標があり、自分自身で3つに対する目標を具体的にあげて遠征に臨みました。

1つ目の闘争心を持つことでは、闘志を持ち冷静さを忘れずにする。

2つ目の、自分のプレーに意味があることでは、DFとのコンビを取り、1つ1つのプレーに自身を持ってプレーをし、消極的にならないこと。

3つ目の、DF、OFで常に攻めることでは、サイドやポストシュートなどで前に詰めて攻めるキーピングをする。

という3つの目標をもって試合に臨みましたが、実際はゲームに出るチャンスが少なかったので、目標を達成とはなりませんでしたが、国際試合に出場を出来たことを誇りに思い、今後チームに帰っても目標事が役立てるようにがんばって行きたいと思います。

フランス戦について

梅基　幸一

今回、テストマッチ2試合と本大会5試合を行なったわけですが、アタックDFをひいて初めて大きな相手に試し、結果が出ました。その中でもフランス戦においては、結果は4点差で負けたものの、後半は互角以上にプレー出来たと思います。

チームの三つの約束事に対して、自分自身の目標を振り返ってみると、まず第一に「闘争心で負けない」ということで『相手の目を見てプレーすること』を挙げたわけですが、それをして先読みが出来るDFをすることによって、思い切って当たれるということですが、センターDFということで、主にポストプレーヤーをマークするので、上から抜けてきた相手に対して試みましたが、タイミングが悪かったり、思い切りがなかったりで、中途半端に終りました。

第二に「自分のプレーに意味があること」ですが、自分では『DFでのチェンジミスがないように声を出す』ことを挙げました。しかし、その場面になる以前に高い位置で抜けてきた相手に対してフォローしてしまい、一発でポストに、それも自分の近いところを通されてやられました。相手との距離とタイミングとポストとの位置関係を考えて、かけひきをしなければならないと思いました。

第三に「常に攻めること」で、攻撃においては『速攻で一度ゴールを見ること』を挙げましたが、この試合では常に意識して出来、味方の走るコースが見えてうまくパスをつなぐことが出来、自分自身でもシュートまでいけたのでこの点は合格であったと思います。

守りについては『ポストの中継ぎに対してカットを狙う』ことを挙げましたが、離れ際をうまくやられて、何本も続けてポストでやられたので、離れ際をもっときたなく、見えないところでつかんだりはたいたりして、ポストが嫌がるように、ボールが来る前にもっとプレーをしなければならないと思いました。

全体的に、ポストでイージーにやられすぎたというイメージが強く、一番弱いところで勝負されたと思います。しかし、攻撃成功率が50%を越えたことと、ミスが10本におさえられたことがこの試合の一番の収穫だったと思います。

スウェーデン戦について

末岡　政広

前回の世界選手権B大会での体験を生かして、全日本チームは、体型で劣っている分、スピードと運動量でカバーすることを考え、DFにおいては、アタックDFを導入することになり、相手のミスを発生させて、速攻での得点力をアップさせることを重点に、2月に合宿を行い、フランスカップに臨むことになった。

フランスカップに入る前に、しばらく外人相手にトレーニングや試合をしていないため、早く外人に慣れるよう、トレーニングマッチをフランスのクラブチームと2試合を組んでもらった。自分たちとしても、あまり練習は出来なかったけど、アタックDFがどれぐらい通用するのか試してみたかった。結果は、2試合ともいい所まで行ったが負けてしまった。しかし、実際にアタックDFで試合に臨んで、自分たちでもイージーミスさえしなければ外人相手でも守れるという自信を得た。

大会に入ると、まずフランスと対戦することになった。試合の結果を分けたのは、前半の終り頃で、日本のミスを速攻で確実に得点に結びつけたフランスが、4点差で勝利を得たという感じで、後半においては同点であった。チームは3連敗してしまったが、決して暗くならず、次の対戦相手スウェーデンにチーム一丸となって戦うように前向き姿勢を全員が持っていた。

スウェーデンは現在世界ナンバーワンといわれるチームであり、この大会の優勝候補でもある。自分としては、この遠征でスウェーデンと対戦することを一番楽しみにしていた。

試合の当日、自分が練習して来たことを思い出し、自分の良かったときの事をイメージしながら会場入りをした。

試合が始まった。立ち上がり、攻撃の指示が徹底出来ず、イージーミスをして、速攻で得点を取られ点差が開いて行った。ここでチームはDFに今まで以上に集中して相手のミスを発生させるように必死に体を動かし、ミスを起こさせることが出来、それを速攻に結びつけて1点1点確実に返して行った。OFも次第に良くなり、キリを中心に攻撃を組み立て、キリをしている瞬間をポイントにおいて、指示を出してからは、互角に戦えるようになった。前半は、終了間際に日本がミスを連発して速攻で得点を取られて、13対15で2点差をつけてスウェーデンが折り返した。後半に入っても、自分たちが練習して来たことを徹底して、残り10分、スタミナが切れ始め、残り10分までは、順調に試合が流れていったが、集中力に失け始めた。その結果、攻撃は成功しているものの最後のパス、シュートが乱れ、速攻につなげられて連続得点を許してしまった。結局35対25と大差で敗れた。

試合は負けてしまったが、まったく歯が立たない相手ではなかったので、今後の努力次第では、勝てない相手ではないことがわかり、チーム全員にかなり自信がついた一戦であった。

今回アタックDFですべての試合に臨み、外人相手に有効だったが、一試合通しての集中力を持続しない限り、世界を相手に互角に対戦は出来ない。集中力を高めるにも、まず基礎体力を向上させ、技術面も向上させて、自分に自信をつけない限り、集中力も平常心も保てないと思う。全員が今まで以上に努力をしなければ、今後も同じ結果を繰り返すと思う。

キューバ戦について

田中　茂

新生全日本として2度目の遠征。また、前回の世界選手権での反省、その後の実力を試す意味でも大切な遠征となった。

前回同様、今回もチームの目標が決められ、それに対する個人の目標が決められた。

1、闘争心

2、自分が行なったプレーに意味がある

3、ディフェンス・オフェンスともに攻める

この3点を柱に試合に臨んだ。

ミーティングでもキューバの高さをいかにして守るかが大きな課題となり、今回練習をやってきたアタックディフェンスによる前後の動きを活発に積極的な守りを行なっていくようにした。

キューバ戦の勝敗で順位決定が大きく変わるので、チーム一丸となり、試合が始まった。

試合内容としては、攻撃は成功し得点は取れるものの、課題であったディフェンス面のもろさが出てしまった。アタックディフェンスのため、オープンスペースを走り込まれ、また、ポストの高さ、パワーにやられてしまった。後半も得点は取れ、追い上げるものの、アタックディフェンスで体力消耗が激しく、前後の動きが少なくなり、大きなポストに、タイミングよくパスを通され、得点を許した。最後まで頑張ったが、1点差で負けてしまった。

負けたこの試合で反省というより、自分たちの現状の力がわかったような気がする。

この試合でも、アタックディフェンスによる体力消耗が負けた原因の一つである。

今後も高さやパワーを守っていくために、このアタックディフェンスは必要となり、これをマスターするとともに体力もつけていかなければならない。

攻撃面にしてみれば、いままで以上に速攻が多く出るようになった。攻撃面での練習で一番多く時間をさいて行なってきた結果が出たと思う。

今の全日本に必要なものは、練習をするということだと思う。練習を積んで行けば世界との差は確実に縮まると思う。

チェコスロバキア戦について

土屋　幸司

前日まで予選リーグを3戦終えて1勝もできないままに、チェコ戦に入った。キューバ戦やスウェーデン戦の前半などけっこう良い感じで来ていたので、今日は、何が何でも勝ってやるぞという気持ちが高かった。

疲れの方もだいぶピークのような状態だったように思っていたが、みんな精神面でカバーしようと、午前中の練習から盛り上がってがんばっていた。

試合前に、この間選手たちで実際目で見た感想など出し合ってミーティングをして会場へ。気持ちを新たにしてチェコを倒すという気持ちしかなかった。

監督の方からチェコのチームは、体育館がすべるからゲームをやりたくないなどと言っていたが、この時点から日本は、チェコになめられていたのかもしれない。とにかくこんなことを言われたものですごく頭にきてしまっていて、それとディフェンスの要の梅基さんが、体の調子をくずしてしまってゲームに出れないこともあって、選手たちの間でみんなで穴を埋め

ると、すごく盛り上がっていたのに、ゲームがいざ始まると、今までの積み重ねてきた内容が、すべて打ち消されるような立ち上がりで、みんなコンビも合わずにフィールドプレーヤーが、バラバラになってしまって、ぎくしゃくしていたと思う。

チェコとは限らないが、格が日本よりも上だと思われるチームと対戦する場合は、立ち上がりが悪いと、自分たちのペースで運べていないと思う。逆に日本が先行して、だいたんにシュートを打って相手チームをあせらせるようにしていかないと勝てないと思う。

この試合では、パスやシュートは雑で、何をやってもうまくいかないという感じで、ハの攻撃をやってもポストと上とのコンビはあわずに、そしてサイドも1対1もほとんどなく、パス回しばかりになってしまっていた。ディフェンスも自分のマークを外してしまうことが多く、すぐ裏をきられていたり、ブロックにかかっては今まで練習してきた外して後ろに下がって2人で壁をつくるということも出せずに終わってしまった。

このゲームで精神面の弱さを身にしみたので、きたえ直して出直していきたい。

決勝戦を観て

藤井　志孝

フランスでの今大会の決勝戦、スウェーデン対旧ソ連の試合を見て、まず最初に思ったことは、外人同士の試合はプレーが早いことである。自分たちが予選リーグのときに試合をしたスウェーデンはそれほど早い動きであるとは思わなかった。しかし、決勝戦のときは、両チーム共に早い動きをしていたように自分は感じました。

この決勝戦を一試合通して、自分は両チームのポストプレーヤーに注意して見ていました。スウェーデンのポストは、ディフェンスとの離れるタイミングがとても良かったのではないかと思います。なぜあのような良いタイミングでディフェンスから離れることができるのか。相手ディフェンスと離れる瞬間の動きが大切であることが分かりました。旧ソ連のポストは、自分よりもかなり大きいポストプレーヤーでした。体が大きいということを利用して、高いところへのパスなどがかなり有効的になってきます。ボールをもらってから自分の体重を利用して左右どちらかに回りシュートまで行くことができれば、かなりの武器になると思いました。ボールをもらってからのゴールへの振り向きを早くすることが大切です。

旧ソ連の攻撃は、ボール回しがかなり早いように見えました。自分たち日本のボール回しの倍ぐらいのスピードに見えました。ボール回しで相手ディフェンスをゆさぶることは攻撃するための基本です。日本はボール回しが遅いため、きっかけなどもディフェンスにわかってしまうことが多くなります。トレーニングのときからパスばなしを早くし、シュートを狙っていくことが必要です。

世界のトップレベルの試合を見て、確かに決勝戦に進出してくるチームはすごい選手たちです。でも、彼らにあれだけのプレーができるのなら、自分たちもハンドボールをしている同じ人間だから、もっとトレーニングをすれば何とでもなると思います。これからのトレーニングに励み〝韓国チームを負かすことができる〟これを自分自身に言いきかせてやっていきたい。

各国のディフェンスについて

佐藤壮一郎

今回は、2度目のヨーロッパ遠征（フランスカップ）ということで、前回の遠征では個人として納得が出来ていなかったので、何か一つでも自分にプラスになり、チームの勝利に貢献出来るようにと気持ちを引き締めてフランスに向った。

今回の遠征で、チームの目標は、闘争心、自分のプレーに意味があること、ＯＦ、ＤＦを常に攻めること、この三つである。この三つを個人の目標として、具体的にしたのが、闘争心では、やられたらやりかえす。自分のプレーに意味があることは、ＯＦは、弱い場所を探す。ＤＦでは、相手の動きを見て分析。ＯＦ、ＤＦ常に攻めるでは、ＯＦは、1対1シュートを狙う。ＤＦは、先手を取る。この中で、弱い場所を探すと1対1シュートを狙う。この二つを上げたので、各国のＤＦを見て感じたことを考えてみた。

最初に、対戦したフランスのクラブチームイブリーは、トップが1人出ていた。サイドの切りなどで対角のポストがフリーになっていたときがあったので、スキがない訳でないと思う。フランスナショナルチームは、1人黒人がトップに出て1人で動いていた。あのようなフットワークをされると攻撃もやりずらい。しかし、あの動きを上手にパスワークなどを使えばＤＦが薄くなると思う。あと時時2・4ＤＦになっていた。急にＤＦが変わったりしたら、相手は攻めにくいと思った。

スウェーデンは、一線で守っていた。日本など体が小さいチームは、ロングシュートが高いＤＦにカットされてしまうし、ポストもＤＦの下を走れてはいるのだが、パスを通すことは難しいので、なるべく速攻で点を取るしかないと実感した。キューバも、一線ＤＦで、中山にマンツーマンに来たりもした。日本はＸの攻撃や中山がマンツーのとき中継などで点が取

れた。キューバDFはそれほど良いとは思わなかったが1点差で負けてしまった。

チェコスロバキアは、一線DFで、日本は大差をつけられてしまい、悔しい思いをした。高い壁に対して、日本はどのように対応していくかが今後の課題だ。いまさら背は伸びないので、スピードやタイミングなど工夫すれば高い壁にも十分に通用する。優勝したCEIは、一・二・三DFであり、中への攻撃に対しては、厚く、スウェーデンも上からのシュートをあまり打たしてもらえなかった。日本もアタックDFをマスターすれば世界でも勝てると思う。

各国のオフェンスについて

渡辺　浩

今回、初めて全日本のメンバーとして、フランス遠征に参加させていただきました。

フランスカップということで、参加した国が、旧ソ連、スウェーデン、ルーマニア、キューバ、チェコ、フランス、イブリ（フランスのクラブチーム）、日本でした。世界のトップクラスのチームとプレー出来たこと、また観戦出来たことはとてもラッキーでした。自分のハンドボール観がだいぶ変ったような気がします。

さて、今回は各国のオフェンスについて、特に目立った点を述べたいと思います。

旧ソ連対スウェーデンの決勝を観戦しましたが、互いにやっていることは基本の繰り返しでした。しかし、パワーとスピードがけた違いでした。日本と外国人とでは、体格の差がありすぎると、よく思われがちですが、旧ソ連のセンターは187㎝ぐらいだし、フランスの活躍した選手も、決して大きくありませんでした。基本を完璧にマスターしているので、どのような型のディフェンスがきても、攻めあぐむことはありませんでした。

次に、勝負の時期をよく心得ているということです。国内のチームなどは、オフェンスがだめだとディフェンスも崩れたり、また逆もよくあるケースです。しかし、トップチームはそのようなことがなく、完璧に割りきって自分自身の仕事を行っていました。これは、かなりの自信をもってプレーしていると思いました。

フランス遠征は、8戦全敗と納得出来る結果ではありませんでしたが、自分の欠点、やらなければならないことが、はっきり見えてきました。これからは基本に戻り、今回の反省を基に、一歩一歩確実に前進していきたいと思います。

各国の速攻について

林　昌英

各国の速攻について、今回のフランスカップでの参加国を見てみてもわかったが、さまざまの速攻のパターンがあると思った。

でも、外人があんな大きな体格をしているのに、あんなに速く走れるのか不思議なものがある。

また、外人がトップスピードで走り込んでくると、やはり私たちのように小さい者には、きびしいものがあると思った。

どこの国でも一番多く使っている速攻は、一人の単独速攻であると思う。この速攻をやるには、まずディフェンスで守らなければならないということになる。たとえば、フランスのトップのすごいフットワークからのボールのインターセプトによる速攻はすごかった。私もトップをやっているので、かなり印象に残っている。

次に、相手の行ったシュートに対するゴールキーパーからのサイドまたはトップへのパスへといった単独速攻だと思う。これはやはりキーパーの判断もかなり関係してくると思うが、このプレーに関して一番印象深いのは、今回のフランスカップでの得点王でもあるキューバの背番号5番のサイドプレーヤーは、速攻に出るタイミングもよかったし、何といっても、シュートが大変上手であったと思う。これは得点を得る中でも一番簡単な取りかただともいえる。

以上のようなことが、各国でもっとも多く使われている速攻であると思う。

他にも2人、3人、4人、5人、6人という二段速攻の様な形のものもあるが、この二段速攻では、韓国のあと追いの速攻の形からのスカイプレーといったようなプレーもある。今回の遠征でも、少しこの速攻からのスカイプレーを練習していたが、私たちもどんどん使った方が展開が変わるのではないかと思う。

私たちは体が小さい分、簡単に点を得るためには、ディフェンスで守ってからの速攻だと思う。

最後に、今回の遠征では、怪我のために1回も試合には出れなかが、各国のプレーを見て、今一番自分がやりたいと思っているバウンドパスを見て来たが、このプレーを早くマスターして自分のものにしたいと思っている。

各国のGKについて

橋本　行弘

各国のGKについて話す前に、まずGKの止め方について私なりの考え方を簡単に話しておきたいと思う。私のハンドボール理論の中にGKがボールを止めるときの反応として、相手シューターのボールへ反応するのか動作に反応するのかの2種類に分けられるといえる。

ボールに反応するのか動作に反応するのかでは、ボールに反応出来る場面（ロング、ミドルシュート）の方が動作に反応する場面（ポ

スト、サイド、カットインシュート）よりGKの阻止率を上げられるのはいうまでもなく、またポストシュートに対してボールへ反応しようとすることは動作に反応しようとすることよりも阻止率を下げることになる。

この定義に基づき各国のGKの動きを考察すると、その多くはボールに反応する場面がほとんどで動作に反応する場面が大変少ない。この考察の背景には、各国の選手（DF）が非常に大きいということで〝打たせて取る〟という形に徹した組織DFで連係を重視するからだ。それが証拠に、CEI（旧ソ連）のGKラフロフは連係に対し非常に素直に反応し、的確に止める。ただし連係の逆を打たれたときには案外もろく、厳しく味方DFを指摘する。もちろんCEIのように大きい選手（約2m前後）がいるチームだからこそ出来る組織DFなのだが……。

さて今大会（フランスカップ）で勉強になったGKでは、最優秀GKに選ばれたスウェーデンのGKマッツ・オルソンである。彼は決勝のCEIとのゲームで、動作に反応しなければならない場面が多くあったにもかかわらず再三のファインプレーをやって見せた。ナゼ出来たのかはこれから考えていかなければならない課題なのだが、決勝戦で力を発揮出来るのは、基本的な技術・裏付け・ハンドボールそのものの理論を持っていなければ精神的な支えにならない。そういった意味においても、彼の行動・DFとの信頼関係・読みの早さ・タイミング・修正の仕方等さまざまな角度からも自分として、チームとしての定義をつくり上げることが今後自分より大きく、重い外人へのコンプレックスをなくすひとつの方法なのかもしれない。

レフェリーについて

源内　利之

自分は、今回初めてナショナルAチームの一員となり、フランス遠征に参加することが出来、とても嬉しく思っています。

さて、本テーマであります「レフェリーについて」自分が感じたこと、思ったことは、まず、日本リーグなどで吹いているレフェリーの笛と違うということです。

日本では、オーバーではないがオーバーくさいプレーに対してオーバーは取られないが、海外の大会になると、オーバーくさいと思われるプレーに対しては、すべてオーバーが取られるし、チャージングに対しても、押し込まれているプレーに対してはいくら胸で当っていてもチャージは取らないし、ライン付近のプレーは、ライン内が取られるなど、とても厳しい目で笛を吹いているなと思いました。

その中でも一番見て感じたことは、スウェーデン対ソ連戦のレフェリーでした。

自分たちが観戦していても完全に9対7で戦っているように見えました。

レフェリーが、スウェーデンに付き、ソ連は7人で戦っていたので、最初は、スウェーデンが優勝すると思っていたが、ソ連の選手たちはレフェリーのひどい笛にも我慢し、自分たちのプレーがしつづりられたのは、やはり、自分のプレーに自信があったのだと思うし、逆に、レフェリーを自分たちに付けていく粘りにもびっくりしました。

やはりレフェリーも人間なので、自分のやった反則に対しては素直に手を上げるなどし、印象を良くすることが大事だと思うし、それがレフェリーを味方に付ける一つの方法だと思います。

フランスカップのレフェリーの印象として、自分は、レフェリーが目立ちすぎていると思いました。

選手がゲームを進めるのに、レフェリーがゲームをコントロールしているように感じました。

自分としては、ナショナルAでの最初の大会だったのに、調子も悪く、自分のプレーが出来なかったので、とても悔しい遠征でしたが、この悔しさをバネに次の大会をめざし頑張っていきたいと思うし、学んだことは伸ばしていきたいと思います。

各国のエースについて

中山　剛

今回のフランス遠征を終えて、悔やしさだけがすごく残った。体調が不十分なまま急遽参加した訳ですが、それでも自分個人の役割りも果たせていなかったように思う。これで自分がエースを名乗ることが出来るのだろうか、と疑問に思える。

今回7試合行った訳だが、確かに各試合とも自分が得点を多く取っているが、それだけでは足りないと思う。各国の代表チームの中には、それぞれ、すごいエースの存在がある。それは、シュートだけという訳でなく、ゲームメイクやパスワークも入ってくる。自分には、その面も足りない。

シュートの面で言えば、CISの15、19番、ルーマニアの7、17番、キューバの13番イブリの17番などがすごい存在である。やはり、かなりの確率で得点している。シュートを打ちまくることは誰だって出来ることである。それを確実に、確率良く得点してこそ本当のエースと呼べるのではないか。

ゲームメイクなどの面では、スウェーデンのオルソンのシュートと思わせてのパス、CISの10番のパスワークもすごいが、常にシュートを狙っている所や、イブリのスマイラジッチのいろいろなシュートテクニックが強くイメージ

に残っている。
　やはり、それぞれ国を代表する選手であるから、それなりの役割りを果たしている。役割りを果たせない者がエースになることは出来ない訳だから、今の自分に足りないもの、シュートの確率、プレー中の即判断、即実行、ゲームのスタミナなど、このようなことを自分に身に付けてこそ、はじめてエースを名乗れるのではないか。そのためにも、これから、4年後に向けて、一歩ずつ進歩していけるように、日々のトレーニングに励むつもりである。ほんの少しだが、ヨーロッパの強豪チームに対しての手応えは感じている。これがマイナスにならないようにしていくつもりである。

コンディションについて

林　康一

　今回のフランス遠征は、新生全日本チーム（蒲生監督）にとって2度目の海外遠征であり、前回3月のヨーロッパ遠征（世界選手権B大会）同様ハードなスケジュールのもとで実施されました。
　前回の遠征では長期の海外遠征経験がない選手が大半であったため、日本との生活リズムの違いや、体の大きな外国人選手との対戦において精神的・肉体的両面から極度に疲労が蓄積され、本来のコンディションを最後まで保持できなかったという反省点が挙げられました。したがって、今回の遠征では選手各自で自分自身のメンテナンスを積極的に行い、厳しく自己管理することで、チームとしてベストコンディションで試合に臨める体制づくりを目標としました。
　そこで私自身、コンディション保持に必要と考えられる要素を次に挙げ、この遠征期間に個人・チームとして意識して行動することで、成果を上げれた内容を感想を含め報告します。

1、時差対策（日本時間▲7H）
　機上での時間が13時間程度あるため、前回の遠征時に機内で7～8時間眠ってしまい、到着後全く眠れず翌日の試合にベストコンディションで臨めませんでした。したがって、今回は機内で仮眠におさえ、到着後、より熟睡できるよう消灯前に大量の発汗を目的として、1時間程度継続した運動（筋疲労にならない程度）を行うことで、翌日は何一つ不具合もなく試合に臨めました。

2、食生活（水分補給）
　日本では米を主食としているので、エネルギー源となる炭水化物を摂取できますが、ヨーロッパではパンが主食のためすぐに空腹になり満足感を得れないので、各自で日本食を準備することで、量・質共にバランスのとれた食生活をおくることができました。
　水分補給に対しては、前回の遠征において摂取量が多過ぎて腹痛から体調を崩したケースがあったので、今回の遠征ではトレーニング及び食事前等に気づいた選手が〝水分を取り過ぎないように〟と積極的に声をかけることで各選手とも意識して摂取することができました。

3、アフターケア
　今回の遠征において、一人の病気・怪我人も出さずに終えることができた理由として、ドクターとトレーナーの同行が挙げられ、特に競技者に必要である試合後のアフターケアの管理が徹底できたことが要因といえます。
　その内容として、運動直後に外傷部や疲労部を氷でマッサージし炎症を防ぐアイシングや、試合後ローテーションでトレーナーからマッサージを受けることができました。
　以上の要素以外にも、効果的な睡眠や、試合直前のアップ等でコンディションが左右されます。したがって私自身、コンディションのコントロールができれば自分の実力を発揮することができると体感しました。今後もより過酷な遠征・試合等があると思いますが、これまで述べた体験を常に意識してプラス要素とすることで、全日本チームの戦力となっていきます。

今回の遠征で得たもの

甲斐　章義

　今回の遠征は、5月12日から14日までまず東京で合宿を組み、体が十分に動く状態までもっていってからの出発であった。
　フランスでは、練習試合を2試合行ってから本大会に入った。本大会でチームとしての約束事を三つ決めた。一つは闘争心、次に自分のプレーに意味があること、そして三つ目にオフェンス、ディフェンスとも「攻める」こと。このことを個人で具体的にどのような行動をとるかしっかり考えた。
　そして迎えたフランスとの第1戦、個々がアップから闘争心をかき立てる工夫をし、立ち上がりからよくオフェンス、ディフェンスともに積極的だった。終盤、1試合通じてのアタックディフェンスともあってスタミナがもたなかった。このようにフランス、スウェーデン、キューバと3試合予選で戦ったのだが勝てなかった。しかし、フランスにもスウェーデンにも自分たちのプレーが十分通用したし、その中でもアタックディフェンスは世界に通用することがわかった。また、キューバ戦は未だに負けた気がしない。
　予選の苦しさを順位決定戦でぶつけることを考え、チームメイトと時間をさいてミーティングなど行ったが、後のゲームはどうしても調子が上がってこず、最終戦のU・S・IVRYにすべてをかけていい内容といい結果を出そうと臨んだ。
　結果を先に言うと惨敗であった。闘争心は持てたと思う。アップ、そして国歌などで盛り上がって行った。しかし、その使い方に問題があったと思う。一人で空回りしてしまっていた。今日のゲームは必ず勝つという気持を意識しすぎていたのかもしれない。
　チームの中で自分の役割を考えると、リーダー的な立場だということを忘れており、平常心で周りのみんなに指示を出すことなど出来ていない。自分のあせりが周りに影響してしまっていた。オフェンスできっかけなどはっきりしていなく、その中でみんなうわべだけの攻めになっていたにもかかわらず、自分は、前を攻めることを意識しすぎてディフェンスに近くなりすぎてポストは動けない、フェイントはかけれないといった具合になってしまった。スタッフに言われるまで気づかず、ようやくディフェンスが見え始めたときには遅すぎた。
　チームをもっと引っぱれるように落ついてプレーをすると同時に、自分の考えで人を動かせるようにしなくてはいけない。また、練習でやって来たことさえ、次第に出なくなり、最終戦はまったくといっていいほど練習したことが出せなかった。また一からやりなおしていきたい。今回の遠征をむだにしないように次の合宿はこの反省を生かしたい。

各地学生春季リーグ戦

北海道学生

北海道学生の春季リーグは、5月15日から3日間、道立北見体育センター、北見市立体育センターで行われた。男子は函館大が11シーズン連続、21回目の優勝を遂げた。

男子一部は、昨シーズン準優勝の北大が初日、一部初参加の道都大に接戦の末敗れ、第2試合でも北海学園大に敗れた。このため2日目の16日、函館大と北海学園大が優勝を争うことになった。

函館大は山田のカットインと鶴田のロングで先行した。だが北海学園大も函館大のディフェンスでの反則を誘い、前半なかばで、6—4と点差は開かなかった。しかし函館大はその後、速攻を中心とする攻撃で9連続ゴールを奪い、ゲームの主導権を握り、前半を17—6で折り返した。

後半に入り、北海学園大も必死に巻き返しを図るが、すでにリズムは函館大。中野、山田、鶴田らのゴールで着々と点を積み上げる函館大に対し、北海学園大も、加藤、酒井らのロングで対抗しようとするが、要所で函館大GK・松の好守に阻まれ、後半なかばで30—10と決定的な差となった。結局、41—12で函館大が北海学園大に快勝した。

一方女子は、北星大が部員不足のため不参加となり、道女短と旭教大の2チームで争われ、道女短が3シーズン連続4回目の優勝を遂げた。

東海学生

（4月5日～5月31日／名古屋市体育館ほか）

〈男子〉

▼1部

中部大 39—17 南山大
中京大 33—19 愛知学院大
名城大 25—22 愛知大
愛知学院大 30—19 南山大
中部大 24—20 愛知大
中京大 25—21 名城大
中京大 23—18 愛知大
名城大 32—16 南山大
中部大 38—21 愛知学院大
愛知学院大 28—18 愛知大
名城大 23—21 中部大
中京大 35—18 南山大
愛知大 24—18 南山大
名城大 23—19 愛知学院大
中部大 28—26 中京大

〔順位〕①中部大②中京大③名城大④愛知学院大⑤愛知大⑥南山大

▼2部

愛知教育大 39—29 名古屋学院大
名古屋大 32—19 日本福祉大
名古屋大 30—12 静岡大
静岡大 23—22 日本福祉大
名古屋経済大 28—20 日本福祉大
名古屋経済大 35—19 名古屋学院大
愛知教育大 41—14 静岡大
名古屋大 33—14 名古屋学院大
愛知教育大 43—20 日本福祉大
名古屋経済大 22—21 名古屋大
名古屋学院大 29—25 日本福祉大
愛知教育大 29—22 名古屋経済大
静岡大 29—21 名古屋学院大
名古屋経済大 28—20 静岡大
名古屋大 25—18 愛知教育大

〔順位〕①愛知教育大②名古屋大③名古屋経済大④静岡大⑤名古屋学院大⑥日本福祉大

▼3部

岐阜大 18—13 豊田高専
滋賀大 25—18 名古屋工業大
豊橋技科大 29—21 岐阜大
三重大 25—19 豊田高専
名古屋工業大 23—12 豊田高専
滋賀大 29—19 三重大
岐阜大 38—21 三重大
豊橋技科大 19—18 滋賀大
豊橋技科大 26—15 名古屋工業大
滋賀大 28—17 豊田高専
三重大 28—19 名古屋工業大
豊橋技科大 23—22 豊田高専
岐阜大 28—25 滋賀大
豊橋技科大 39—26 三重大
岐阜大 30—19 名古屋工業大

〔順位〕①豊橋技術科学大②岐阜大③滋賀大④三重大⑤名古屋工業大⑥豊田高専

▼4部

名古屋商科大 23—22 岐阜教育大
朝日大 20—17 岐阜経済大
名古屋商科大 25—17 岐阜経済大
常葉学園大 35—21 岐阜経済大
名古屋商科大 22—14 朝日大
愛知医科大 26—25 岐阜教育大
愛知医科大 12—0 東海大
岐阜教育大 35—22 岐阜経済大
常葉学園大 25—13 東海大
岐阜教育大 25—19 東海大
愛知医科大 25—21 岐阜経済大
岐阜教育大 21—18 朝日大
名古屋商科大 25—16 愛知医科大
朝日大 24—19 東海大
愛知医科大 16—14 常葉学園大
岐阜経済大 25—19 東海大
常葉学園大 26—23 岐阜教育大
名古屋商科大 12—0 東海大
愛知医科大 25—21 朝日大
朝日大 22—19 常葉学園大
常葉学園大 30—25 名古屋商科大

〔順位〕①名古屋商科大②愛知医科大③常葉学園大④岐阜教育大⑤朝日大⑥岐阜経済大⑦東海大⑧豊田工業大

〈女子〉

▼1部

中京大 35—6 南山大
中京女子大 43—10 愛知教育大
中京大 30—13 愛知教育大
中京女子大 38—10 南山大
愛知教育大 17—13 南山大
中京女子大 29—16 中京大
中京女子大 29—10 愛知教育大
中京大 33—16 南山大
中京大 27—9 愛知教育大
中京女子大 43—6 南山大
愛知教育大 14—12 南山大
中京女子大 34—17 中京大

〔順位〕①中京女子大②中京大③愛知教育大④南山大

▼2部

岐阜大 16—7 日本福祉大
三重大 20—12 日本福祉大
三重大 22—14 岐阜大
文理短大 19—12 常葉学園大
岐阜大 19—12 静岡大
文理短大 31—8 日本福祉大
三重大 19—12 常葉学園大
静岡大 23—19 日本福祉大
文理短大 18—15 三重大
文理短大 30—13 静岡大
文理短大 20—12 岐阜大
常葉学園大 17—10 日本福祉大
三重大 19—13 静岡大
常葉学園大 18—10 岐阜大
常葉学園大 23—17 静岡大

〔順位〕①名古屋文理短期大②三重大③常葉学園大④岐阜大⑤静岡大⑥日本福祉大

▼入替戦

南山大 23—22 愛知教育大

名古屋大　29―29　愛知大
　　　　　6PTC5
豊橋技科大　37―33　日本福祉大
豊田工高専　26―25　名古屋商科大
南山大　15―11　文理短大
※名古屋大は1部昇格
※愛知大2部降格
※豊橋技術科学大2部昇格

【総評】東海学生連盟の1992年春季リーグ戦は、4月5日に開幕、5月24日の最終日、5月31日の入替戦まで、熱気のうちに終了した。

男子1部は、中部大学、中京大学、名城大学の3強がまれに見る激戦を演じ、結局互いに星を食い合って、3すくみ状態になり、得失点差（25％ルール）の末、わずか1点、中京大学を上回った中部大学が、6年連続9度目の優勝を飾った。中京大学は同率ながら2位。名城大学も中部大学を2点差で破りながら3位となった。

最終日の中京大学―中部大学は、得失点差もからみ、最後まで目を離せない白熱戦となった。中京大学は、1年振りに留学から帰った小山哲央監督の采配が冴え、ここまで全勝で、勝てば完全優勝。中部大学は、敗れれば2敗となり、1敗の名城大学よりも順位をさげて3位に転落する瀬戸際わだったが、勝てば3校が1敗同士の同率となり優勝の目も出てくる。

ここまで中京大学は得失点がプラス18、中部大学はプラス15。つまり、2点差をつけて中京大学に勝てば中部大学が、逆転優勝が決まるわけだ。

試合は、その中部大学が終始2点、3点とリードを奪う展開となってから場内が沸いた。前半は中部大学が13―12。後半、中部大学は19―16としたところで、この日絶好調の辰巳選手が負傷リタイヤ。わずかにペースが乱れるところをついて、中京大学が追いこみ、残り2分には中京大学近藤選手が飛びこんで25―27。終盤は中京大学が押しぎみだったが、残り40秒、中部大学は左サイドでペナルティーを奪い、これを柿谷選手が慎重にきめて、28―25とし ほぼ試合を決めた。中京大学もノータイム直前にゴールを奪い26―28としたが、結局『2点差』のハードルを越えられず、中部大学の優勝となった。

女子1部は、スピーディな攻撃を誇る中京女子大学が、キャプテン陰選手を中心にまとまった攻撃を見せ、2位の中京大学以下を、いずれもワンサイドゲームで攻め落し、すべてのゲームに勝って完全優勝を果たした。中京女子大学の優勝は9年連続17回目である。

中京女子大学は、久しぶりに攻守にスキのないチームに仕上っており、塙敏監督のベンチワークもすばらしく、西日本インカレ以降の活躍に期待したい。

男子2部は愛知教育大学、3部、豊橋技術科学大学、4部、名古屋商科大学が優勝した。

女子2部は、かつての名門、桜台高校（愛知・男子）を率いた名将稲石三二氏を監督に迎えて、新加盟した名古屋文理短期大学が、一気に突っ走って優勝を飾った。

（山崎正利）

北信越学生

（5月22～24日／金沢市総合体育館ほか）

〈男子〉

▼1部
金沢工大　28―26　新潟大
金沢工大　31―23　富山大
金沢工大　28―16　金沢大
金沢工大　37―14　信州大
新潟大　20―20　富山大
新潟大　34―16　金沢大
新潟大　33―15　信州大
富山大　26―21　金沢大
富山大　22―13　信州大
金沢大　19―17　信州大
〔順位〕①金沢工大②新潟大③富山大④金沢大⑤信州大

▼2部Aリーグ
福井大　28―19　富医薬大
福井大　37―5　金沢美大
富医薬大　27―8　金沢美大

▼2部Bリーグ
長野大　22―15　北陸大
長野大　32―9　富山国大
北陸大　24―18　富山国大

▼1、2決定戦
福井大　23―20　長野大

▼3、4位決定戦
富医薬大　17―10　北陸大

▼5、6位決定戦
富山国大　45―4　金沢美大
〔順位〕①福井大②長野大③富山医薬大④北陸大⑤富山国際大⑥金沢美大

〈女子〉
仁愛短大　22―11　富山大
仁愛短大　16―6　金沢大
仁愛短大　22―10　新潟大
仁愛短大　22―14　信州大
金沢大　16―13　富山大
富山大　28―19　新潟大
富山大　17―10　信州大
新潟大　17―14　金沢大
新潟大　18―18　信州大
〔順位〕①仁愛短大②富山大③金沢大④新潟大⑤信州大

【総評】平成4年度春季リーグ戦は、5月22日㊎～5月24日㊐の3日間、金沢市総合体育館及び金沢市中央体育館に於いて開催された。参加チームは、男子1部5校、男子2部6校、女子5校、計16チームであった。

男子1部リーグは、前年優勝の金沢工業大学と、前年秋季リーグ優勝の新潟大学の争いになると思われたが、新潟大学が富山大学と引き分け一歩後退した。

しかし、全勝の金工大と背水の陣で臨む新潟の最終戦は、取られたらすぐに取り返すという、互いに一歩も引かない好試合となった。前半速攻で常にリードを奪う金工

大に対し、新潟は10番白石のミドルなどで追いつき14対14で終了した。後半も同様の展開であったが、残り10分新潟がついに逆転に成功、このまま新潟がついに逆転に成功、このまま いくかとおもわれたが、粘る金工大が、サイド白野の3連続得点やセンター伊吹のミドルシュートで、再逆転に成功し28対26で春季リーグ戦4連覇を飾った。
男子2部リーグは、予選リーグを危なげなく勝ち進んだ福井大学対長野大学の決勝戦となった。実力が一枚上手と思われる福井に対し、初の1部リーグ入りをめざす長野は気持ちが充実しており大接戦となった。前半福井が1点リードで折り返したが、後半立ち上がり長野がすぐに追いつき、長野押し気味の試合展開となった。しかし1部リーグ返り咲きを狙う福井が、残り2分を切ってようやく突き放し3点差で振り切った。長野の頑張りが目立った試合であった。
女子は、仁愛女子短期大学が実力通り他を寄せつけず、全勝優勝を飾った。

関西学生

(4月5日～5月23日／大阪中央体育館ほか)

〈男子〉

▼1部

大阪体育大 33－14 大阪経済大
大阪体育大 29－12 京都産業大
大阪体育大 35－9 立命館大
大阪体育大 35－10 近畿大
大阪体育大 35－21 桃山学院大
大阪体育大 30－12 同志社大
大阪経済大 25－17 京都産業大
大阪経済大 32－16 立命館大
大阪経済大 30－22 近畿大
大阪経済大 37－20 桃山学院大
大阪経済大 31－22 同志社大
京都産業大 29－15 立命館大
京都産業大 18－17 近畿大
京都産業大 24－24 桃山学院大
京都産業大 23－17 同志社大
立命館大 25－18 近畿大
立命館大 24－24 桃山学院大
立命館大 21－21 同志社大
近畿大 24－22 桃山学院大
近畿大 23－20 同志社大
桃山学院大 32－14 同志社大

〔順位〕①大阪体育大②大阪経済大③京都産業大④立命館大⑤近畿大⑥桃山学院大⑦同志社大

▼2部

関西外語大 34－23 大阪教育大
大阪教育大 25－20 関西大
大阪教育大 28－25 仏教大
大阪教育大 32－23 天理大
大阪教育大 33－15 神戸大
大阪教育大 27－17 京都教育大
関西外語大 22－16 関西大
仏教大 27－24 関西外語大
関西外語大 27－21 天理大
関西外語大 27－19 神戸大
関西外語大 25－25 京都教育大
関西大 19－18 仏教大
関西大 21－14 天理大
関西大 26－13 神戸大
関西大 22－18 京都教育大
仏教大 27－26 天理大
仏教大 34－24 神戸大
仏教大 22－22 京都教育大
天理大 29－17 神戸大
天理大 26－23 京都教育大
神戸大 24－21 京都教育大

〔順位〕①大阪教育大②関西外国語大③関西大④仏教大⑤天理大⑥神戸大⑦京都教育大

▼3部

京都大 31－20 大阪市立大
京都大 23－16 大阪府立大
京都大 27－18 神戸学院大
京都大 27－17 大阪大
京都大 24－12 京都工芸大
京都大 36－17 関西学院大
大阪市立大 24－23 大阪府立大
大阪市立大 17－16 神戸学院大
大阪市立大 27－19 大阪大
京都工芸大 21－18 大阪市立大
大阪市立大 32－24 関西学院大
大阪府立大 23－19 神戸学院大
大阪府立大 24－16 大阪大
大阪府立大 24－14 京都工芸大
関西学院大 20－19 大阪府立大
神戸学院大 22－21 大阪大
神戸学院大 21－16 京都工芸大
神戸学院大 21－16 関西学院大
大阪大 22－15 京都工芸大
大阪大 25－19 関西学院大
京都工芸大 22－18 関西学院大

〔順位〕①京都大②大阪市立大③大阪府立大④神戸学院大⑤大阪大⑥京都工芸繊維大⑦関西学院大

▼4部

甲南大 26－18 龍谷大
甲南大 28－20 奈良大
甲南大 28－18 和歌山大
甲南大 31－12 姫路独協大
甲南大 31－15 大阪産業大
甲南大 31－20 奈良教育大
龍谷大 27－22 奈良大
龍谷大 23－17 和歌山大
姫路独協大 27－25 龍谷大
龍谷大 25－24 大阪産業大
龍谷大 28－19 奈良教育大
奈良大 21－15 和歌山大
奈良大 26－15 姫路独協大
奈良大 25－23 大阪産業大
奈良大 28－20 奈良教育大
和歌山大 18－16 姫路独協大
和歌山大 19－16 大阪産業大
和歌山大 22－21 奈良教育大
姫路独協大 17－16 大阪産業大
奈良教育大 25－19 姫路独協大
大阪産業大 28－26 奈良教育大

〔順位〕①甲南大②龍谷大③奈良大④和歌山大⑤姫路独協大⑥大阪産業大⑦奈良教育大

▼5部

滋賀大 23－21 神戸商船大
滋賀大 21－13 大阪歯科大
滋賀大 29－17 大阪学院大
滋賀大 15－14 追手門大
滋賀大 27－10 大阪工業大
滋賀大 24－13 大阪薬科大
神戸商船大 17－17 大阪歯科大
神戸商船大 29－18 大阪学院大
神戸商船大 24－21 追手門大
神戸商船大 22－18 大阪工業大
神戸商船大 37－22 大阪薬科大

大阪歯科大 16−13 大阪学院大
大阪歯科大 21−12 追手門大
大阪歯科大 18−10 大阪工業大
大阪歯科大 17−12 大阪薬科大
大阪学院大 21−18 追手門大
大阪学院大 26−11 大阪工業大
大阪学院大 30−12 大阪薬科大
追手門大 24−16 大阪工業大
追手門大 31−20 大阪薬科大
大阪工業大 20−15 大阪薬科大
〔順位〕①滋賀大②神戸商船大③大阪歯科大④大阪学院大⑤追手門大⑥大阪工業大⑦大阪薬科大

▼6部

京都外語大 15−13 八代学院大
京都外語大 19−9 兵庫教育大
大阪外語大 18−17 京都外語大
京都外語大 棄権 姫路工業大
八代学院大 20−14 兵庫教育大
八代学院大 19−17 大阪外語大
八代学院大 棄権 姫路工業大
兵庫教育大 28−14 大阪外語大
兵庫教育大 棄権 姫路工業大
大阪外語大 棄権 姫路工業大
〔順位〕①京都外国語大②八代学院大③兵庫教育大④大阪外国語大⑤姫路工業大

▼入替戦

京都外語大 15−13 大阪薬科大
大阪産業大 26−23 神戸商船大
奈良教育大 21−18 滋賀大
龍谷大 25−20 京都工芸大
甲南大 29−18 関西学院大
大阪市立大 22−21 神戸大
京都教育大 19−17 京都大
桃山学院大 27−16 関西外語大
大阪教育大 27−22 同志社大
※京都外国語大は5部に昇格
※龍谷大、甲南大は3部に昇格
※大阪市立大は2部昇格
※大阪教育大は1部に昇格

〈女子〉

▼1部

武庫川女大 29−10 大阪教育大
武庫川女大 14−11 大阪体育大
武庫川女大 31−6 関西外語大
武庫川女大 31−10 天理大
武庫川女大 36−9 仏教大
武庫川女大 33−14 京都教育大
大阪教育大 24−14 大阪体育大
大阪教育大 15−11 関西外語大
大阪教育大 20−11 天理大
大阪教育大 21−18 仏教大
大阪教育大 28−16 京都教育大
大阪体育大 24−21 関西外語大
大阪体育大 27−15 天理大
大阪体育大 32−7 仏教大
大阪体育大 39−10 京都教育大
関西外語大 17−16 天理大
関西外語大 26−16 仏教大
関西外語大 23−11 京都教育大
天理大 22−16 仏教大
天理大 24−13 京都教育大
仏教大 35−12 京都教育大
〔順位〕①武庫川女子大②大阪教育大③大阪体育大④関西外国語大⑤天理大⑥仏教大⑦京都教育大

▼2部

立命館大 25−16 龍谷大
立命館大 25−10 関西大
立命館大 33−10 成蹊女短大
立命館大 33−7 甲南大
立命館大 28−10 神戸大
立命館大 36−9 関西学院大
龍谷大 14−5 関西大
龍谷大 12−10 成蹊女短大
龍谷大 15−8 甲南大
龍谷大 23−15 神戸大
関西学院大 14−13 龍谷大
関西大 11−6 成蹊女短大
関西大 12−8 甲南大
関西大 11−7 神戸大
関西大 14−10 関西学院大
成蹊女短大 19−9 甲南大
成蹊女短大 17−15 神戸大
成蹊女短大 21−6 関西学院大
甲南大 12−11 神戸大
甲南大 18−12 関西学院大
神戸大 16−14 関西学院大
〔順位〕①立命館大②龍谷大③関西大④大阪成蹊女短大⑤甲南大⑥神戸大⑦関西学院大

▼3部

大阪薬科大 11−10 和歌山大
大阪薬科大 16−10 園田学園女大
奈良女大 18−16 大阪薬科大
大阪薬科大 17−12 滋賀大
大阪薬科大 15−14 奈良教育大
大阪薬科大 21−6 京都女大
和歌山大 15−11 園田学園女大
和歌山大 9−7 奈良女大
滋賀大 12−11 和歌山大
和歌山大 19−8 奈良教育大
和歌山大 27−4 京都女大
園田学園女大 18−13 奈良女大
園田学園女大 16−7 滋賀大
園田学園女大 19−13 奈良教育大
園田学園女大 24−5 京都女大
奈良女大 16−16 滋賀大
奈良女大 14−6 奈良教育大
奈良女大 20−6 京都女大
滋賀大 19−9 奈良教育大
滋賀大 棄権 京都女大
奈良教育大 13−1 京都女大
〔順位〕①大阪薬科大②和歌山大③園田学園女子大④奈良女子大⑤滋賀大⑥奈良教育大⑦京都女子大

▼4部

関西女短大 31−4 大阪府立大
関西女短大 29−3 兵庫教育大
関西女短大 39−6 大阪外語大
関西女短大 棄権 追手門大
大阪府立大 16−11 兵庫教育大
大阪府立大 23−16 大阪外語大
大阪府立大 16−5 追手門大
兵庫教育大 12−10 大阪外語大
兵庫教育大 19−6 追手門大
大阪外語大 20−5 追手門大
〔順位〕①関西女子短期大②大阪府立大③兵庫教育大④大阪外国語大⑤追手門学院大

▼入替戦

関西女短大 33−2 京都女大
神戸大 21−10 和歌山大
関西学院大 20−13 大阪薬科大
仏教大 24−15 龍谷大
立命館大 21−10 京都教育大
※関西女子短期大は3部に昇格
※立命館大は1部に昇格

【総評】壬申（みずのえ さる）の意味するところは、草木が大きく伸びようとするように、進取の気に富み、思慮深く、剛気闊達であるとされています。1992年、

即ち平成4年の日本ハンドボール界は正にそのように感じる次第です。言い換えれば、アトランタ・オリンピック元年として、大きな目標に向ってやりがいのあるハンドボールの世界が、目の前に広がっているのです。

この時、我が関西学生ハンドボール連盟として今何を成さねばならぬかと言いますと、答はひとつ。関西学生ハンドボール連盟のすべての面での、より一層の充実を図ることが、ひいては日本のハンドボール界に貢献できるものと確信しています。昭和22年、連盟として発足して、本年で45歳となった関西学生ハンドボール連盟は、この春季リーグ戦に於いて、男子40チーム、女子26チーム合わせて66チームの参加があり、さらに男子2チームが加入の意志表明をしておるところであります。正に大所帯であります。試合数にして188試合、日数は4月5日から5月17日までの内29日間、その上に入替戦が2日間、14試合ある訳でございまして、会場、審判員、オフィシャルの手当は大変であり、学生委員諸君には頭の下る気持でいっぱいです。勿論理事の方および京都ハンドボール協会、大阪ハンドボール協会の方々のご尽力には、この紙面をお借りして、深く感謝の意を表わさせて頂きます。

さて、リーグ戦の会場の一部に、本年西日本大会の当番連盟として、当学連が用意をした体育館を使ったのですが、この体育館は、平成9年度の第52回国民体育大会のハンドボール会場として、正式使用予定が決定している施設です。これを下見したことはそれなりに意義があったものと信じています。

審判員におきましては、他県との交流もでき、互いに技術の研磨にも役立ったのであります。また、学生審判員で優秀とされた者たちの表彰を行いました。喜んでくれたものとおもっています。

試合の方は、男子大阪体育大学、女子武庫川女子大学の優勝で幕を閉じたわけですが、男子2位の大阪経済大学の活躍も注目されるところです。ここ数年この2校で雌雄を決することが続いていますが、早く第3、第4のチームの台頭が望まれるところです。そういう意味で、女子において2位に大阪教育大学が躍進したことは、明かるい材料であり、賞賛されるべきでしょう。その他上下の部の入替が、多くあったことが特記される事でしょう。これは下位のチームのレベルアップがあった証拠とおもっています。なかなかできることではないからです。

その他、順位決定には対戦者間の勝者を重視したり、開会式、閉会式を体育館で全チーム参加のもとに行い、各部優勝チームに優勝杯を授与し、出来る限り66チーム全体の一体感を図るようにしています。これからも、これらのことを忘れることなく関西学生ハンドボール連盟を運営してゆきたいと思っています。

（渡邊　巖）

中四国学生

【総評】中四国学連発足30年目に当たる平成4年度春季リーグ戦は、5月19日より21日までの3日間、岡山県ハンドボール協会の協力を得て、岡山県総合グランド体育館で開催された。

男子1部では山口大が、創部3年目にして1部に上がり躍進めざましい広経大と開幕戦で対戦した。山口大は広経大の西田、河のロングシュートを積極的なディフェンスでよく防いだが、再三のノーマークシュートをGK三牧の美技に阻まれて最後までペースをつかめず敗退した。

昨秋の覇者・広島大は主将GK山崎がゴールを死守し、波野、山岡が全試合ともコンスタントにミドルシュートを決め、さらに山崎からのボールを中野をはじめ全員が速攻で着実に得点を重ね、危なげなく全勝優勝をかざった。

2部は徳山大が高知大に競り勝ち優勝するかに思われたが、広修大戦に後半逆転されて敗退。結局、奥田の活躍で10点差で広修大に大勝した高知大が得失点で徳山大を振り切り3シーズンぶりに優勝した。

女子1部では全勝同士の岡山県短大と広島大が最終日に対戦した。新入生の加入によって戦力が急速に高まった岡山県短大は、広島大のエース・山内を徹底的にマークして速攻で着実に加点し、昭和63年秋季大会以来通算6度目の優勝をかざった。

2部は川崎医療福祉大と四国大学の新加盟で7チームとなったため、試合形式をリーグ戦、順位決定戦とした（香川大は棄権）。

岡山女短大は創部5年目で山陽学園短大からリーグ戦初勝利をあげて第3位、鳴門教育大は小笹、源の活躍で後半岡山大を逆転し、創部3年目にして初優勝をとげた。

九州学生

【総評】九州学生連盟は、大学所属範囲が福岡から沖縄までの広範囲にわたっていることもあって、年1回の全九州学生選手権のみの開催であったが、九州学生界の活性化を目指し、本年度より春と秋の年2回開催の九州学生リーグとしてスタートに踏み切った。

当然のことながら、その準備段階ではさまざまな困難にぶつかったが、各県協会にも協力していただく了承を得、また学生の負担する経費の関係上、春と秋それぞれ集中開催とし、いずれかを北部地区と南部地区で開催することとなった。

その第1回大会がゴールデンウィーク中に福岡市民体育館、福岡市南区体育館、福岡大学第2記念会堂の3会場で開催された。

男子26チーム、女子7チームの参加により男子は4部制（4部はA、Bブロックに分かれ）、女子は1部制で実施された。

記念すべき第1回大会は、福岡大学のアベック優勝で幕を閉じたが、男子2位の東和大学も最終戦で福岡大学に1点差に肉薄する好ゲームを展開し、大会を盛り上げた。各部も熱戦がくり広げられ、各チームも試合数では満足のようであった。成績は別掲（前号に掲載）の通りである。

最終日の翌日には入替え戦も行われ、自動昇格の1チームも含めて各部2チームずつが昇格する熱戦であった。なお、入替え戦後の男子1部6チーム、女子3チームが8月に大阪にて開催される西日本学生選手権に出場する。

今大会では、今後の大会運営に直接的な影響をもたらす学生審判員の養成も同時に行った。男女1部校より推薦された9名の学生審判員は、事前に数回の研修会を経験して大会に臨んだ。

学生以外の審判員とペアーを組みながらの5日間は、学生審判員にも大会運営にも好影響をもたらし、成功裡に終えることができた。

（田中　守）

asics
ATHLETIC SHOES
Barcelona'92
アシックスは
オリンピックキャンペーンの
オフィシャルスポンサーです。
ゴールに狙いをつけた傾斜角。
SKYHAND α
踏み付け部のエッジ
につけた傾斜が、
倒れ込みシュートを
打ちやすくしました
コートは狭く、ゴールポストも
小さいハンドボール。厚い防御
の壁を突き破ってシュートを決める
のは、簡単なことではありません。
わずかな間隙をぬって決める倒れ込
みシュートこそ、まさにハンドボールの醍
醐味です。スカイハンド®ジャパンα-Sは、
アウターソール踏みつけ部のエッジに傾斜
をつけることにより、倒れ込みシュートを打ちや
すくしました。
インドアのために生まれたスパイラルソールが、
すばやい攻撃を支えます。
ハンドボールに要求されるものは、なによりもまずス
ピード。インドア専用に開発されたラバー製のスパイ
ラルソールがすばやい動きにあわせて威力を発揮し
ます。動きやすく、滑りにくい。しかも、踏み付け部に
は溝を配し、屈曲性をアップ。攻撃に、防御に、鍛え
ぬかれたフットワークに磨きがかかります。
品名 スカイハンド® ジャパンα-S
品番 THH711 メーカー希望小売価格 ¥16,000(消費税抜き)
αGEL
カラー/●ホワイト×Wレッド・マリンブルー ●ホワイト×Wマリンブルー・レッド
サイズ/22.5〜29.0cm
がんばれ!ニッポン!
JGS25-18
アシックスは
オリンピックキャンペーンの
オフィシャルスポンサーです。
株式会社アシックス
●商品についてのお問い合わせは株式会社アシックス消費者相談室までどうぞ。
●®は㈱アシックスの登録商標です。
〒650 神戸市中央区港島中町7丁目1番1 TEL(078)303-2233(専用)・(078)303-3333(大代表)
〒130 東京都墨田区錦糸4丁目10番11号 TEL(03)3624-1814(専用)・(03)3624-2221(大代表)
スポーツ券
¥1000
スポーツあげたい、
スポーツほしい。
全国共通スポーツ券

強化委員会だより

アトランタに向けて各地に遠征

～'92の活動予定から

強化委員長　井　薫

'92年度のナショナル(N)、ジュニア(JR)の活動予定と目標につき述べたいと思います。

すでに5月に男子Nが、フランスでの国際トーナメント「シャレンジ・マーレーヌ」に参加していますが、8月の北京での男女JRのアジア選手権大会から、本格的な国際大会への出場と、それらに備えた合宿が始まります。

5月のフランスの大会については、蒲生監督より、若手中心のチーム編成で、課題の積極的ディフェンスに手応えを得た、との報告を受けています。

さて男女JRのアジア選手権は、'93年の世界選手権大会の予選を兼ねますが、男子は1つの出場権をめぐり、日本、中国、韓国、そしてこのところめっきり力をつけてきた中東勢を交えての大会で、まさに熾烈な戦いだと思います。

女子はすでに出場権を持つ韓国を除き、3ヶ国に出場権が与えられますので、日本、中国、台湾、北朝鮮が実力で横一線とすると、日本が勝ち名乗りをあげる可能性は高いと思われます。期待したいものです。

いずれにしても、ジュニアの成長なくして、ナショナルの明日は語れませんが、今回も大会が国体ブロック予選と重なり、スタッフはメンバーの選考に苦慮しています。これからのビッグテーマであるジュニア育成の環境づくりのご理解とご協力をみなさまにもお願いしたいと思います。

9月4日から上海で開催される初めての極東大会には、男女Nが出場します。

この大会の背景には、ご承知の通りアジアは東西に広く、特に西の中東諸国とは生活習慣や宗教などで大きく異なります。また、今後は旧ソ連のモンゴル周辺のいくつかの共和国のアジア大会等への参入も予測され、ハンドボールも今こそ極東の仲間が力を合わせてリーダーシップを発揮するべき時だと、昨夏の広島での大会期間中に話しが出て、早くも実現したのがこの極東大会です。

男女Nは、アトランタ・オリンピックにつなぐ世界選手権大会のアジア予選が来夏に迫りますが、出場の顔ぶれは今回の極東大会と同じであり、そのトライアルマッチとして位置づけ最大限活用すべきだと思います。

蒲生、緒方両監督には、テーマと結果について設定と分析を任せ、それを基に津川、藤原両専門委員長と共にアジアを制する手がかりをつかみたいと思います。

女子Nは、さらに11月20日からリトアニアのビルニウスで行われるB世界選手権に出場しますが、夏以降メンバーを絞りこんで日本の戦術、戦略を明確にして臨んでもらいたいと思います。

第12回世界学生選手権は、12月13日からサンクトペテルブルグ(旧レニングラード)で行われますが、この大会もまた全日本総合選手権と同時期で、チーム編成さえうまくいけば過去の最高位の7位を破りそうな現在の学生界のレベルであり、ここが活況であることが即ナショナルに反映される部分であり、何とか強いチームで参加して欲しいものです。

この他に男女JRの韓国遠征、男子Nの11月のオランダ国際出場、女子Nの明春3月のヨーロッパ遠征が計画されていますが、いずれのチームも状況に応じた十分の準備とテーマを明確にすることを強く要望したいと思います。

また、ビルニウス、サンクトペテルブルグともに旧ソ連領で、流動的な国際情勢の中であり、遠征に際しては十分の安全性と対応力に配慮したいと思います。

神奈川県協会だより

1、県協会の当面の問題について

神奈川県協会が発足して約半世紀を迎えようとしています。

これまでの県協会の発展過程を振り返ってみたとき、現、若崎重富会長（神奈川県体育協会専務理事）をはじめとして、多くの諸氏がハンドボール競技を愛好し、神奈川にねざして、ハンドボール競技の普及・発展に傾注されてこられました。

その結果、年々加盟チームの増加と共に競技人口も増し、全国的にもチーム数の多い有数県として認識されていることと声えられます。

また、県協会の方針が競技人口の増加により、普及段階から競技力向上への方針の転換期を迎えたことにより、重点的課題をもち、精力的な活動へと切りかわったことで、今日では、とりわけ高校生では全国的レベルの競技力水準に達し、その発展の途をたどったと考えています。

一方、このような発展途上にあって協会が組織的にも拡大し、なお各専門委員会が確立され、旺盛な組織的専門委員会活動が徹底的に行なわれてきたことも見逃せません。

しかし、最近の状況では、ひと頃のチームの急増期もすぎ、その現象にも陰りがみられ、ここ二・三年の傾向では、加盟チーム数の停滞から、ひいては競技人口面での減少傾向が顕著にあらわれきています。

現在、このような状況にあって、一つには、チーム数、競技人口の現状維持をいかに保つか、二つには、競技人口の減少傾向にあるなかで、現段階にいたった競技力をいかに維持し、さらに向上させてゆけるのかという新しい局面をもつにいたり、県協会では当面の課題として、この二つの問題をどう解決してゆくかの大きな課題を抱えています。

このような現象は、県下のいずれのスポーツ種目団体にもみられることと、また、差異はあると思われますが、いずれの都道府県にもみられる現象の一面であると認識しながらも由々しき問題と考えざるを得ません。

2、協会の新たなる前進にむけて

深刻な問題を抱える現状の中にあって、今年度当初、本県では二巡目の国民体育大会（第53回・平成10年）の開催へ向けて、今年度正式に『準備委員会』が発足し、中央競技団体の視察を迎えて、正式決定をまつに至りました。

この間、県下では国体検討準備委員会（「神奈川らしい国体づくり検討委員会」）段階で、これまでの国体をふまえ、また、今後の国体のあり方の検討を進めるにあたり、学識経験者をまじえ数カ月の月日がついやされ検討が重ねられた『基本構想』（すぽとぴあ'98プロジェクトのトータルデザイン）がまとまり、今年度当初正式の場で発表をみました。

紙面の関係で詳細にお知らせすることができませんが、とにかく膨大な構想の提起がなされ、今までの国民体育大会の経験では想像できぬもので、正直なところ当協会にあっても戸惑いをかくしきれません。

ただ現在、日本のスポーツの現状の中で抱えているいくつかの諸問題の解決に挑戦し、また、新たなるスポーツの魅力と感動をすべての人々に享受するための理想郷を求めたものとして魅力的なものであると思われます。

このような現況をふまえ、当協会にあっても、県スポーツの発展ひいてはハンドボール競技のさらなる発展に通じるものと確信します。

そのためにも当協会役員は勿論のこと、多くの県民の英知をもって組織的活動をするなかで、当協会は、積極的な「夢の掛橋への仕掛け人」となるべきと考えています。

（文責―県協会理事長・森川利昭）

各地の大会結果

東北

第42回青森県春季高校選手権

（5月9、10日／今別高校）

〈男子〉

▼1回戦
五所川原 24－23 三本木農

▼2回戦
青森商 39－5 五所川原
青森 24－11 野辺横分
青森東 21－11 十和田工
青森山田 21－10 三本木
青森南 30－9 五所川原工
野辺地工 27－13 柏木農
七戸 28－15 鰺ヶ沢
野辺地 12－11 今別

▼3回戦
青森商 30－13 青森
青森山田 16－13 青森東
青森南 37－8 野辺地工
野辺地 21－7 七戸

▼準決勝
青森商 29－13 青森山田
青森南 21－19 野辺地

▼決勝
青森商 30（14－6、16－7）13 青森南

〈女子〉

▼1回戦
野辺地 35－4 野辺地工

▼2回戦
青森中央 24－4 野辺地
青森東 19－3 三本木
青森商 11－6 六ヶ所
青森西 22－12 今別

▼準決勝
青森中央 34－5 青森東
青森西 22－12 青森商

▼決勝
青森中央 21（12－5、9－3）8 青森西

関東

関東高校大会埼玉県二次予選

（4月25、26日、5月3、4、10日／三郷市総合体育館ほか）

〈男子〉

▼1回戦
浦和学院 43－9 大宮北
浦和西 18－13 城西川越
城北埼玉 21－8 鴻巣
小松原 21－18 大井
埼玉栄 37－8 科学技術
越谷南 17－13 三郷工技
川口青陵 28－20 伊奈学園
農大三 21－13 草加
川口北 39－11 越谷西
西武台 24－14 春日部東
埼玉第一 18－12 朝霞
川口工 18－14 浦和南
大宮南 21－10 川口東
庄和 19－10 春日部
浦和市立 33－3 秩父
浦和実業 28－11 春日部工

▼2回戦
浦和学院 29－9 浦和西
小松原 23－12 城北埼玉
埼玉栄 27－8 越谷南
農大三 27－18 川口青陵
川口北 31－6 西武台
川口工 14－12 埼玉第一
大宮南 27－16 庄和
浦和実業 28－6 浦和市立

▼準決勝リーグA組
浦和学院 30－6 小松原
浦和学院 33－10 埼玉栄
浦和学院 24－16 農大三
農大三 23－12 小松原
農大三 22－17 埼玉栄
埼玉栄 17－13 小松原

▼準決勝リーグB組
浦和実業 24－13 川口北
浦和実業 19－12 川口工
浦和実業 17－13 大宮南
川口北 22－10 川口工
川口北 15－14 大宮南
大宮南 20－14 川口工

▼決勝リーグ
浦和学院 24－16 農大三
浦和学院 18－14 川口北
浦和学院 22－17 浦和実業
浦和実業 30－11 農大三
浦和実業 24－13 川口北
農大三 17－7 川口北

〔順位〕①浦和学院②浦和実業③農大三④川口北

〈女子〉

▼1回戦
浦和実業 34－6 春日部女
越谷南 21－17 筑波坂戸
大宮前 17－7 農大三
八潮 28－13 熊谷女子
小松原女 36－8 所沢北
草加 24－19 草加東
庄和 22－13 浦和市立
伊奈学園 27－14 朝霞
埼玉栄 26－13 上尾東
草加南 21－13 浦和南
行田女子 24－11 羽生第一
川口北 17－14 川口女子
西武台 20－8 浦和西
春日部工 21－7 大宮北
浦和学院 19－5 本庄女子
川口青陵 27－4 大宮開成

▼2回戦
浦和実業 32－7 越谷南
八潮 24－12 大宮南
小松原女 37－8 草加
伊奈学園 25－6 庄和
埼玉栄 29－6 草加南
川口北 11－7 行田女子
西武台 25－5 春日部工
川口青陵 21－11 浦和学院

▼準決勝リーグa組
浦和実業 24－10 八潮
浦和実業 22－8 小松原女
浦和実業 20－7 伊奈学園
伊奈学園 16－14 八潮
伊奈学園 15－10 小松原女
小松原女 24－14 八潮

▼準決勝リーグb組
川口青陵 23－18 埼玉栄
川口青陵 19－14 川口北
川口青陵 20－18 西武台
埼玉栄 15－12 川口北
埼玉栄 25－10 西武台
川口北 15－15 西武台

▼決勝リーグ
浦和実業 20－7 伊奈学園
浦和実業 18－13 埼玉栄
浦和実業 21－14 川口青陵
川口青陵 23－18 埼玉栄
埼玉栄 19－15 伊奈学園
伊奈学園 15－13 川口青陵

〔順位〕①浦和実業②川口青陵③埼玉栄④伊奈学園

東海

三重県高校総合体育大会

（5月30、31日、6月1日／霞ヶ浦体育館ほか）

〈男子〉

▼Aブロック1回戦
桑名西 15－11 四日市西

津東 29－2 朝明
名張西 18－13 上野工
▼同2回戦
桑名 31－10 桑名西
津東 24－15 名張西
▼同決勝
桑名 31－10 津東
▼Bブロック1回戦
四日市工 28－10 四日市南
川越 20－10 高田
四日市中央工 20－6 上野
桑名工 15－7 四日市四郷
▼同2回戦
四日市工 35－7 川越
桑名工 24－11 四日市中央工
▼同決勝
四日市工 20－10 桑名工
▼Cブロック1回戦
亀山 30－5 海星
津工 18－10 津西
桑名北 16－10 津
四日市 45－7 尾鷲
▼同2回戦
亀山 35－9 津工
四日市 20－12 桑名北
▼同決勝戦
亀山 24－10 四日市
▼1位～3位決定リーグ戦
桑名 12－11 亀山
四日市工 25－17 亀山
四日市工 17－16 桑名
〔順位〕①四日市工業②桑名③亀山④津東、桑名工、四日市

〈女子〉

▼Aブロック1回戦
桑名西 16－11 尾鷲
▼同2回戦
暁 40－1 桑名西
四日市西 21－17 津
▼同決勝
暁 28－10 四日市西
▼Bブロック1回戦
四日市南 9－5 松阪女子
▼同2回戦
四日市商 33－7 四日市南
上野 18－9 川越
▼同決勝
四日市商 35－4 上野
▼Cブロック1回戦
桑名 9－6 四日市四郷
▼2回戦
津東 30－4 桑名
名張西 13－10 四日市
▼同決勝
津東 13－7 名張西
▼1位～3位決定リーグ戦
暁 18－7 津東
四日市商 14－7 津東
暁 15－9 四日市商
〔順位〕①暁②四日市商③津東④四日市西、上野、名張西

近畿

第45回京都府高校総体

（5月10、16、17日／田辺高校ほか）

〈男子上級の部〉

▼Aゾーン・1回戦
西乙訓 18－6 久御山
▼2回戦
洛北 16－12 西乙訓
両洋 12－11 西宇治
田辺 20－6 洛東
東稜 16－9 乙訓
▼3回戦
洛北 14－8 両洋
東稜 22－10 田辺
▼決勝
洛北 19－17 東稜
▼Bゾーン・1回戦
洛水 17－5 日吉丘
木津 20－1 宇治
京都学園 18－10 八幡
北嵯峨 17－3 洛星
▼2回戦
洛水 20－12 木津
北嵯峨 20－9 京都学園
▼決勝、
北嵯峨 9－9 洛水
（抽選勝）
▼Cゾーン・1回戦
京都西 18－6 向陽
南八幡 11－7 堀川
東宇治 18－6 城陽
平安 17－10 桃山
▼2回戦
京都西 21－9 南八幡
東宇治 31－14 平安
▼決勝
京部西 17－12 東宇治
▼Dゾーン・1回戦
桂 20－6 伏見工
東山 13－12 洛西
大谷 12－9 山城
城南 11－7 嵯峨野
▼2回戦
桂 23－12 東山
大谷 13－10 城南
▼決勝
桂 27－13 大谷

〈男子下級の部〉

▼Aゾーン・1回戦
洛北 13－4 京都学園
堀川 25－2 宇治
東稜 8－6 両洋
東宇治 16－11 東山
洛水 7－3 八幡
▼2回戦
洛北 23－3 洛陽工
堀川 12－5 西宇治
東宇治 8－4 東稜
山城 16－4 洛水
▼準決勝
堀川 10－8 洛北
東宇治 8－6 山城
▼決勝
堀川 12－11 東宇治
▼Bゾーン・1回戦
伏見工 17－5 南八幡
嵯峨野 17－4 西乙訓
京都西 8－6 北嵯峨
桂 16－7 洛星
乙訓 11－2 田辺
▼2回戦
北稜 14－12 伏見工
同志社 11－10 嵯峨野
桂 8－6 京都西
向陽 10－3 乙訓
▼準決勝
同志社 12－3 北稜
桂 13－9 向陽
▼決勝
桂 20－10 同志社

〈女子上級の部〉

▼Aゾーン・1回戦
府立商業 11－3 久御山
西山 13－3 塔南
▼2回戦
向陽 20－7 府立商業
西宇治 15－5 西山
▼決勝
向陽 15－10 西宇治
▼Bゾーン・1回戦
桂 10－7 桃山
京都女子 12－1 山城
城南 20－5 西乙訓
▼2回戦
東宇治 15－6 桂
城南 13－11 京都女子
▼決勝
東宇治 14－4 城南
▼Cゾーン・1回戦
東稜 12－3 北稜
京都学園 8－7 田辺
精華 18－6 洛東
▼2回戦
洛北 26－3 東稜
精華 22－7 京都学園
▼決勝
洛北 28－9 精華
▼Dゾーン・1回戦
日吉丘 11－3 乙訓
北嵯峨 5－1 洛水
光華 22－1 鴨沂
▼2回戦
洛西 17－11 日吉丘

光華 11－9 北嵯峨

▼決勝

洛西 7－7 光華（抽選勝）

〈女子下級の部〉

▼1回戦

京都女子 25－1 洛水
向陽 21－4 北嵯峨
乙訓 6－0 城南

▼2回戦

東宇治 7－7 洛水
洛北 11－2 京都学園
向陽 9－4 南八幡
府立商業 7－1 乙訓

▼準決勝

洛北 14－3 東宇治
向陽 15－3 府立商業

▼決勝

向陽 8－7 洛北

中国

山口県高校総合体育大会

（5月30、31日、6月1日／岩国工高ほか）

〈男子〉

▼1回戦

岩国 15－11 徳山
下松 22－10 田部
下関第一 30－20 岩国商
下関中央工 29－13 徳山商
防府商 32－4 宇部工
西京 23－14 華陵
小野田工 22－12 野田学園
下関西 21－7 山口
早鞆 15－12 徳山工
南陽工 14－13 防府西

▼2回戦

下松工 22－8 岩国
下松 26－14 下関第一
下関中央工 29－9 下関工
高水 37－18 防府商
岩国工 20－15 西京
小野田工 26－22 広瀬
下関西 28－16 早鞆
岩陽 30－10 南陽工

▼3回戦

下松工 21－5 下松
高水 19－16 下関中央工
岩国工 28－11 小野田工
岩陽 25－7 下関西

▼準決勝

下松工 20－13 高水
岩陽 26－20 岩国工

▼決勝

下松工 21（11－3、10－3）6 岩陽

〈女子〉

▼1回戦

岩国商 28－6 山口中央
長府 7－6 防府
徳山 18－12 岩陽
徳山商 49－9 響
高水 39－2 新南陽
熊毛北 25－4 防府西
西京 23－4 徳山工
華陵 28－8 岩国

▼2回戦

岩国商 21－5 長府
徳山商 25－5 徳山
高水 25－9 熊毛北
華陵 27－6 西京

▼準決勝

岩国商 19－14 徳山商
高水 20－15 華陵

▼決勝

高水 18（13－7、5－8）15 岩国商

山口県の代表、(上)高水高、(下)下松工

四国

全国高校総体愛媛県予選

（5月30日～6月1日／松山北高校）

〈男子〉

▼1回戦

今治東 28－11 新居浜商
松山西 14－12 新居浜西

▼2回戦

今治工 24－11 吉田
松山工 40－12 宇和島南
松山商 24－13 今治東
松山南 20－8 松山東
今治西 26－11 新居浜東
松山北 12－7 松山中央
新田 34－10 伊予
新居浜工 33－9 松山西

▼準々決勝

松山商 32－5 今治工
松山工 28－13 今治西
松山北 33－19 新田
新居浜工 25－13 松山南

▼準決勝

松山商 19-10 松山工

新居浜工 22-18 松山北

▼3位決定戦

松山北 19-18 松山工

▼決勝

新居浜工 21（9-8、8-9、2-2、2-1）20 松山商

〈女子〉

▼1回戦

小松 14-8 東温

▼2回戦

松山北中島 21-10 今治西

今治東 16-5 松山中央

新居浜商 30-4 伊予

松山商 24-2 三崎

今治南 10-9 松山西

今治北 19-9 弓削

新東 33-4 大島

松山北 27-4 小松

▼準々決勝

松山北 30-5 松山北中島

今治東 23-4 今治南

新居浜商 14-13 新居浜東

今治北 36-6 松山商

▼準決勝

松山北 26-18 今治東

今治北 28-9 新居浜商

▼3位決定戦

今治東 24-19 新居浜商

▼決勝

今治北 18（9-8、9-7）15 松山北

九州

第46回宮崎県民体育大会

（5月23～24日／宮崎西高）

〈男子〉

▼1回戦

児湯郡 32-6 西諸県郡

北諸県郡 23-14 西都市

▼2回戦

児湯郡 22-21 都城市

宮崎郡 18-13 延岡市

小林市 24-17 東臼杵郡

宮崎市 29-11 北諸県郡

▼準決勝

児湯郡 24-22 宮崎郡

宮崎市 22-14 小林市

▼決勝

宮崎市 32（16-11、16-13）24 児湯郡

〈女子〉

▼1回戦

宮崎市 16-12 宮崎郡

▼準決勝

宮崎市 12-9 小林市

延岡市 13-4 都城市

▼決勝

宮崎市 19（9-4、10-5）9 延岡市

福岡県高校総体

（5月31日、6月7日／福岡高校 香椎高校）

〈男子〉

▼1回戦

九州産業 23-10 宗像

福岡 14-11 小倉工

大宰府 18-10 須恵

若松 16-11 筑紫丘

泰星 21-11 浮羽

小倉西 18-14 福岡西陵

春日 24-7 日新館

久工大附 23-11 香椎

▼2回戦

九州産業 19-3 福岡

若松 27-7 大宰府

久工大附 23-9 春日

泰星 25-13 小倉西

▼準決勝

九州産業 27-15 若松

久工大附 26-13 泰星

▼決勝

久工大附 12（3-5、9-6）11 九州産業

〈女子〉

▼1回戦

新宮 19-2 小倉商

福岡女商 13-9 須恵

三井 14-9 香椎

春日 19-8 浮羽

▼2回戦

九州女子 24-3 新宮

福岡 14-12 福岡女商

早良 14-13 三井

筑紫女 33-7 春日

▼準決勝

九州女子 8-4 福岡

筑紫女 35-7 早良

▼決勝

筑紫女 11（7-4、9-6）10 九州女子

協会だより

[6月度常務理事会]

6月6日：於：日本協会
出席・渡邉副会長他10名
1.平成3年度事業報告
原案通り承認
2.平成3年度決算報告
原案通り承認
3.平成4年度第一次補正予算案審議
前年度決算確定による繰越金修正
各種委員会の活性化のために交通費増額（各10万円）
日本オリンピック委員会委託金、スポーツ振興基金補助金ともに減額されたことに伴う強化事業予算の見直し
強化事業実施財源不足分の予備費による補填
原案通り承認
4.各委員会委員検討
各委員長より提出された候補者名簿検討承認、未定の委員会については至急に選出し次回常務理事会で検討する。
各委員長担当
5.各種大会出席役員検討
決定分について承認、未決定分については早急に決定すること
総務担当

[平成4年度第1回定例理事会]

6月13日：於：岸体育館会議室
出席14名、委任状5名、欠席13名
1.平成3年度事業報告
常務理事会決定通り承認
2.平成3年度決算報告
常務理事会決定通り承認
3.旅費規定改定審議
前年度常務理事会において決定していた宿泊費一泊5千円を7千円に、従来無支給であった東京近郊の旅費も支給する改定案
原案通り承認
4.平成4年度第一次補正予算案審議
常務理事会決定通り承認
5.報告事項
委員会組織状況
各委員会活動状況
主要行事出席予定役員

[平成4年度第1回評議員会]

6月27日：於：東興ホテル会議室
出席19名、委任状23名、欠席9名
1.平成3年度事業報告
理事会決定通り承認
2.平成3年度決算報告
理事会決定通り承認
3.平成4年度第一次補正予算案審議
理事会決定通り承認
4.報告事項
アジアハンドボール連盟役員改選状況
日本協会組織
各委員会活動状況
5.来年度役員人事検討のため11月に臨時評議員会を開催することを決定

続いている未来に私たちがいること、忘れないでいよう。

9月12日土曜日。学校週5日制がいよいよ始まります。これは子供たちだけのお話ではありません。先生や、お母さんはもちろん、お父さんや、お隣りのお姉さん、お兄さん、近所のおじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃん全員に関わるお話です。ですから当然、お店や会社で働く人たちにも関係してきます。

たった一日のことかもしれません。けれど、とても意味のある一日なのです。だってそこにはたくさんの可能性が含まれているのですから。子供たちの未来、大人たちの未来、よりよい社会に私たちが暮らせるよう、長い目で見ていくことは、とても意義のあることなのです。その第一日目を成功させ、つなげていくために、それぞれの立場から、みんなでこの土曜日に参加していこうではありませんか。

9月12日土曜日

私たち一人一人が参加する生涯学習の

コミュニケーションメモリアルです。

（財）日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三二一号
昭和四十年六月七日 平成四年七月二十六日 印刷
第三種郵便物認可 平成四年八月一日 発行
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 代表（418）二三六一
振替 東京 六ー五八三四八番
編集兼発行人 中澤重夫

定価三百五拾円
（年間購読料三千三百円）